



国立大学法人

電気通信大学

The University of Electro-Communications

共創進化型イノベーション・commons

Campus Masterplan

2022

2023年3月

学長挨拶	．．．	2
1. 共創進化型キャンパスを目指して		
1-1 電気通信大学の理念とビジョン	．．．	3
1-2 キャンパスの未来像 ～現実空間と仮想空間の融合～	．．．	4
1-3 リアルなキャンパスの新たな役割	．．．	6
1-4 UEC 共創進化型イノベーション・commons	．．．	7
2. キャンパスマスタープランの役割と基本姿勢		
2-1 キャンパスの計画的整備の必要性	．．．	9
2-2 キャンパスマスタープランの役割	．．．	9
3. キャンパスの現況と課題		
3-1 電気通信大学の現況	．．．	10
3-2 キャンパスの課題	．．．	12
4. キャンパス整備の基本方針と戦略		
4-1 キャンパス整備の基本方針	．．．	13
4-2 キャンパスの特色となる空間要素	．．．	15
5. フレームワークプラン		
5-1 骨格形成とゾーニング	．．．	16
5-2 交通計画	．．．	18
5-3 建物計画	．．．	20
5-4 インフラ計画	．．．	21
5-5 環境・エネルギー計画	．．．	22
5-6 防災計画	．．．	23
6. リーディングプロジェクト	．．．	24
7. 多様な財源及び整備手法の導入		
7-1 多様な財源の導入について	．．．	30
7-2 PPP/PFI 手法（官民連携整備手法）等による整備可能性追及について	．．．	30
7-3 大学資産（土地・建物）の有効活用による整備促進について	．．．	32
資料編		
・大学概要	．．．	35
・現況情報	．．．	36
・大学理念、UEC ビジョン ～beyond 2020～	．．．	39
・「UEC 共創進化スマート大学キャンパスマスタープラン」アンケート	．．．	42
・D.C.&I.戦略推進会議 K9 キャンパスマスタープラン検討チーム会議及び WG の記録	．．．	50
参照資料		
・カーボンニュートラル推進計画	．．．	52
・環境報告書 2022	．．．	52

学長挨拶

電気通信大学は、1918年に創設された無線電信講習所を前身組織に持ち、1952年に東京都調布市にキャンパスを移転してきて以来、調布団地を主要キャンパスとして人類の継続的発展に貢献する知と技の創造と実践を目指し、社会と共に発展を続けてきました。

本学は、創設から100年を超える歴史の中で培ってきた情報通信を核としたAI、ネットワーク、ロボット、光・量子技術等を基に、社会の大きな変革に対応し、社会の期待に応えるため「UECビジョン ～beyond 2020～」を掲げ、「共創進化スマート社会」の実現に貢献し、自らも共創進化スマート大学となることを目指しています。

このビジョンの下、令和4年度においては、本学における様々な取組の全体最適を図りつつ社会実装を推進するための全学組織である「共創進化スマート社会実現推進機構」を発足し、「共創」「進化」をキーワードに本学における様々な研究成果と最先端テクノロジーの全体最適を図りつつ進化し続ける世界的な教育・研究機関を目指して活動を進めています。

これらの実現には、建物やキャンパス全体の基盤整備が必要であることから、キャンパスのあるべき方向性を示す新たなキャンパスマスタープラン「共創進化型イノベーション・commons マスタープラン」を策定いたしました。あらゆる人々が心豊かに生きがいを持って暮らせるように、現実空間と仮想空間が高度に融合し、経済発展と社会課題解決を両立しながら自立的に進化し続ける「共創進化スマート社会」の実現を可能としたイノベーション・commons（共創拠点）整備を進め、地域の方々にもより身近に感じていただけるキャンパスを目指してまいります。

これからも皆様方のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2023年3月

国立大学法人電気通信大学

学長

田野 俊一



1. 共創進化型キャンパスを目指して

1-1 電気通信大学の理念とビジョン

本学は、人類の持続的発展に貢献する知と技の創造と実践を目指すという理念のもと、本学の強みを生かす先鋭的なビジョン「UECビジョン ～beyond 2020～」を令和3年7月に掲げ、教育・研究の強化を進めている。このビジョンでは、我が国が目指すべき未来社会の姿として提唱されているSociety5.0を、人間知・機械知・自然知の融合により新たな価値（進化知）を創造し様々な課題を自立的に解決しながら発展し続ける「共創進化機能」を内包した未来社会、すなわち「共創進化スマート社会」と考え、本学はその実現に貢献することを宣言し、以下の目標を掲げている。

1. 共創進化スマート社会の世界的な教育・研究機関、実現拠点となる。
2. 自らも共創進化スマート大学となる。
3. あらゆる活動に対してD.C.&I.戦略を実践し教育・研究・人材の循環拠点を形成する。

これらの目標を達成するためには、ダイバーシティの拡大、ダイバーシティ間の連携（コミュニケーション）及びその発展（イノベーション）を促進し、許容することが不可欠な要素であり、それを実行する場となるキャンパス環境を整えることが重要である。

また、国立大学法人には、キャンパス全体を、多様なステークホルダーとともに共創が展開される「イノベーション・コモンズ（共創拠点）」へ転換することが求められており、「世界をリードする最先端研究の推進」「産業界との共創による地域産業振興等への貢献」「地方公共団体や教育機関等との共創による人材育成等の推進」「社会課題の解決への貢献」の4つの観点を、キャンパス全体として複合的に推進していくことが重要である。

このことから、イノベーション・コモンズを核とした「共創進化型イノベーション・コモンズ マスタープラン」を策定し、本学の目指すキャンパスの未来像へのフレームワークをまとめ、次に立案する、効果的かつ効率的な施設・インフラ等キャンパス全体の予算計画を含めた整備計画（アクションプラン）の基盤とする。これらを推進することにより、本学の特性や特色を活かしたイノベーション・コモンズ（共創拠点）の実現を達成し、社会改革のプレイヤーの先陣をきり、他大学等にも波及・転用することで、特色ある共創拠点整備に寄与していく。



1-2 キャンパスの未来像 ～現実空間と仮想空間の融合～

インターネットを始めデジタル化・モバイル化が加速することによって、世界中で大きな変革が起きている。Society5.0は、「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムによって、経済発展と社会的課題の解決が両立する人間中心の社会」とされているが、本学は、これに加えて自律的に進化し続ける共創システムを組み込んだ「共創進化スマート社会」の実現を目指している。この第一歩として、自らのキャンパスを実証実験の場としてキャンパスの未来像を構想し、大学キャンパス全体が共創進化型イノベーション・コモンズとなるためのキャンパスマスタープランを策定する。

①仮想空間のキャンパス

インターネット上の仮想空間では、場所や時間を選ばず様々な情報にアクセスすることが可能である。学修や研究、地域連携に関連する様々な交流や情報交換の場を、メタバースの中に創ることも可能になってきた。ラーニング・コモンズなどの「共有の場（コモンズ）」がWEB上に存在するとイメージしてもらえば良い。（図1）

しかし、この仮想空間のキャンパスでは、偶然の出会い、雑談やひそひそ話、アイコンタクトなど、現時点では実現できないことも数多い。コロナ禍によるオンライン授業を通じて、私たちはそれを実感している。

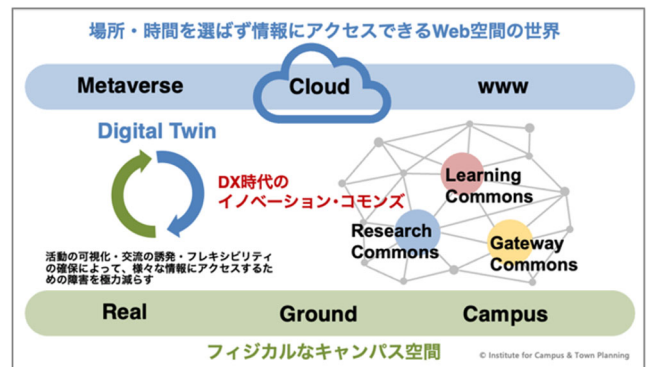


図1：サイバー空間とフィジカル空間

②現実空間のキャンパス

一方、現実空間のキャンパスにおいては、社会課題を解決するためのイノベーションを生み出す共創拠点形成が求められており、その源泉となる「活動の可視化・交流の誘発・自由度の高い空間の確保」が行えるキャンパスへ変換していく必要がある。しかし、現実空間のキャンパスには物理的な制約が多く、仮想空間のキャンパスのように、場所や時間を選ばずに瞬時に様々な情報にアクセスできる環境をつくるには、いまだに多くの障害がある。

③現実空間と仮想空間が融合する未来

この障害を取り除くためには、学生や教職員が現実空間のキャンパス（リアルなキャンパス）と仮想空間のキャンパス（バーチャルのキャンパス）を自在に往来できる環境モデルを構築することが有効と考える。それが、本学が目指す共創進化型キャンパスの未来像である。

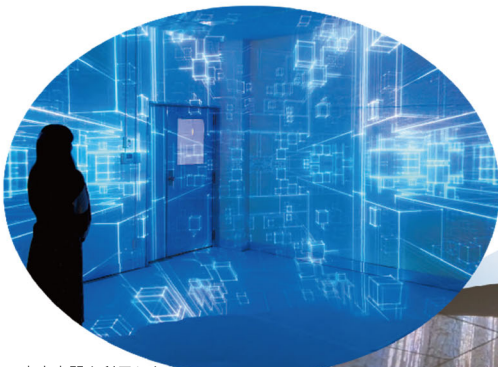
現在、パソコンやスマートフォン等のデバイス（情報端末）を使って、遠隔会議ツールなどでバーチャルに他者と繋がることは可能である。また、同様のデバイスを使いながらも、仮想空間（メタバース）上に自分の分身（アバター）をおいて様々な活動をすることも現実味を帯びてきた。さらに将来はデバイスの進化が遂げられ、現実空間（リアル）に拡張現実（AR）を投影して立体視できるようになると、現実空間と仮想空間が融合し、同じ場所に同時に“存在”することも不可能ではない。例えば、現実空間の講義室で講義を受けている生徒と、実際は遠く離れた海外の学生が、あたかも隣り同士で座っているように、講義やゼミに参加する事も可能になるだろう。

領域横断研究を推進するためのオープンラボでも、仮想空間にいる海外の研究者を加えて、議論しながら実験を進めることもできるかもしれない。

キャンパス内に、バーチャル森林を出現させ、森林浴を楽しみながらゼミを行うことも可能となるかもしれない。何も無い場所にバーチャルな壁を作り、そこにセキュリティ機能を設けて、入構チェックが行えるようになるだろう。

仮想空間で表現した宇宙を現実空間に落とし込んで、実体験する事も可能になるかもしれない。

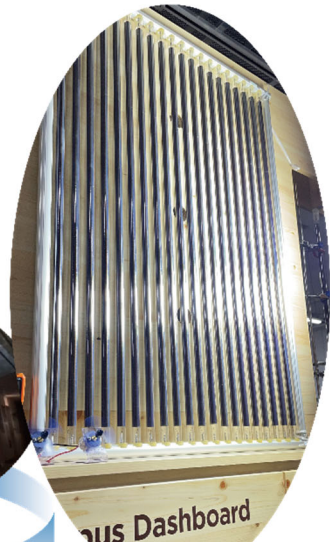
本学がこれらの将来を見据えて研究開発を推進するためには、“室内”や“屋外”といった概念を取り除いた無限の可能性を持つ空間を用意する必要がある。つまり、キャンパスの屋外と、壁を取り除けば屋外とひとつの空間を形成できる建物の地上階部分「地上レベル」に、リアルとバーチャルが融合する未来のための実証実験の場をつくりたいと考えている。



室内空間を利用した
プロジェクションマッピング



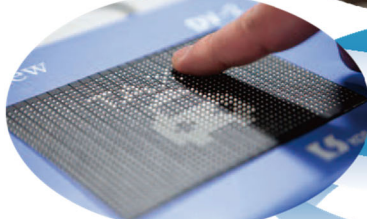
生物のヘビを
模したロボット



都市型円筒形太陽電池システム



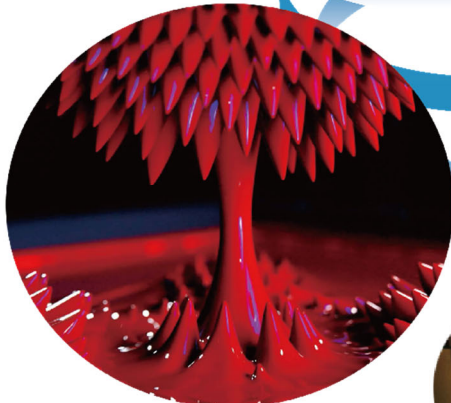
廊下を利用した
プロジェクションマッピング



点字ディスプレイを用いた情報伝達



水面反射を用いた空中像とのインタラクション



3次元磁場制御による蛍光磁性流体彫刻



電磁波による不可視領域イメージングの研究



並列動作する信号分離専用マシン

1-3 リアルなキャンパスの新たな役割

①実証実験の場としてのキャンパスモデル

実際に、現実空間と仮想空間を融合させるための実証実験の場所を現実空間に考えたとき、ある特定の場所に限定するのではなく、見通しがきいて様々な人が参加しやすい地上レベルに前もってその場所を用意しておくことが有効で得策である。地上レベルをフィジカルな制約（空間を隔てる固定的な要素）から極力解放するというキャンパスモデルである。（図2）

地上レベルを学生・教職員・地域住民の共有の場としてフレキシビリティを確保することにより、誰もが自由に行き交い、キャンパスを見渡すことができ、様々な出会いを誘発することが可能となる。

さらに多くのコンテンツと結びつく仮想空間への入口となる仕掛け・デバイスを点在させ、建物内部や、キャンパスで行われている教育研究の場へアクセスできるゲートウェイとする。こうすることで、活動の可視化、交流の誘発、フレキシビリティをさらに強化しながら、多様な情報にアクセスしやすい環境インフラを創ることができるのではないだろうか。それが仮想空間との親和性を高めたリアルなキャンパスの役割である。

地上レベルの気持ちの良い屋内・屋外空間は、グリーントランスフォーメーション（GX）に役立つ実証実験の場所にもなる。デジタル技術によって、海外協定校の様子をリアルタイムに出現させ、グローバルなつながりを常に意識させることも不可能ではない。国内・海外の学生・研究者たちと気軽にコンタクトできる場所を生み出すことができれば、イノベーション創出の可能性も大きく広がっていく。

②共創進化型イノベーション・コモنزの実現に向けて

既存のキャンパスで今すぐこれを実現することは難しい。また、理系ものづくり系の大学として地上レベルに配置してセキュリティを高めざるをえない諸室・諸機能があることも確かである。

しかし、機能的に閉ざすべき空間であっても、視覚的・心理的に閉じた空間に見せない工夫は可能である。物理的に閉じた壁を、プロジェクションマッピングなどを用いて仮想空間への入口とすることは比較的容易にできる。

イノベーション・コモنز実現のため、これまでのキャンパスマスタープランを改め、新たなプランを策定し、このモデルに近づけていくことは可能ではないだろうか。

リアルとバーチャルを融合させる可能性・研究シーズは、学内に数多く存在する。センシング、AI、太陽光発電（PV）など、本学の得意分野を、キャンパスを実証実験の場としながら発展させ、Society5.0時代の新たな社会構築に役立てていかななくてはならない。

人間知・機械知・自然知を融合させ、未来を拓く変化を許容し、常に進化・発展し続けるキャンパス、それがリアルなキャンパスが持つべき新たな役割であり、共創進化型イノベーション・コモنزの実現に寄与する。

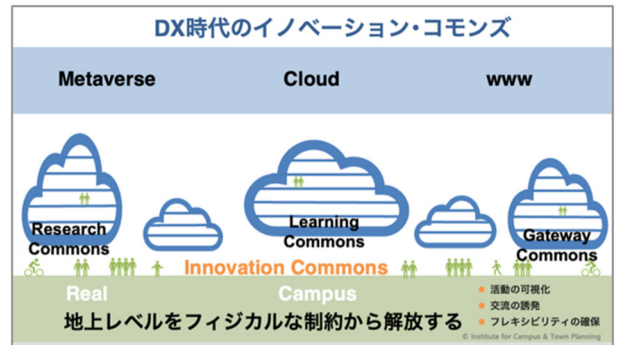
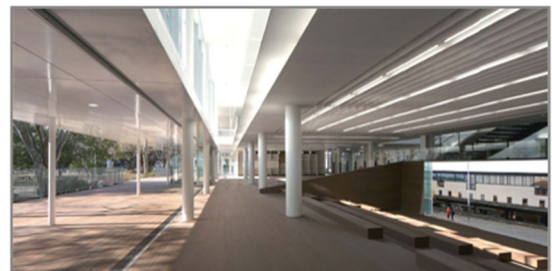


図2：デジタルとリアルが融合したキャンパスモデル



写真：
地上レベルの制約が少ないキャンパスと建築
千葉大学アカデミックリンク（上）

屋外とシームレスにつながりつつ、使用目的に合わせて
変化可能な大空間
NEWoMan 横浜（左）

1-4 UEC 共創進化型イノベーション・commons

リアルなキャンパスとバーチャルのキャンパスの融合を実現するために、本学が共創進化スマート大学になるための領域横断型の全学体制「共創進化スマート社会実現推進機構」により、それを実装するための環境づくりをパイロットプロジェクトとして立ち上げ、共創進化型イノベーション・commonsのあるべき姿を実証していく。本学が目指す共創進化スマートキャンパスの新たな骨格を形成していくための基本方針と具体的な施策を以下に示す。

共創進化型イノベーション・commonsの基本方針

「共創」「進化」をキーワードに本学における様々な研究成果と最先端テクノロジーの全体最適を図りつつ、現実空間と仮想空間が融合した「共創進化スマート社会」の実現に向けて、自立的かつ連続的に進化し続ける世界的な教育・研究機関を目指す。

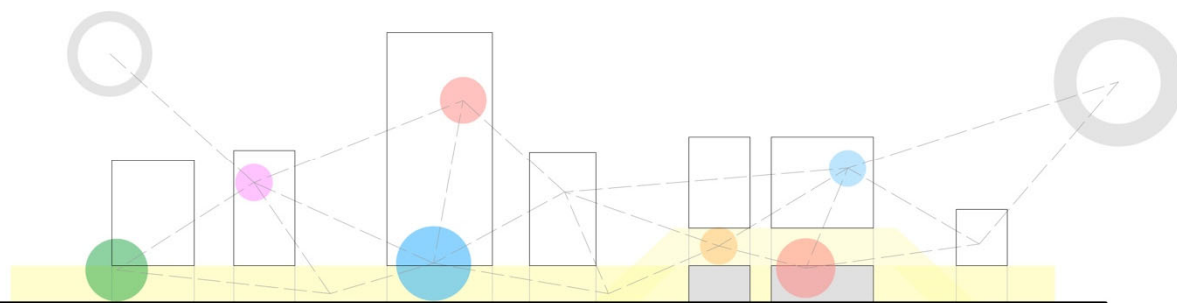
- ①多様な学生・研究者や異なる研究分野、地域・産業界との「共創」の場
- ②時間と空間に縛られない個人に常に最適化された教育研究の「場」
- ③生活の質（QOL）の向上
- ④実験、実証、実現の「場」
- ⑤グリーン社会の構築に寄与するシステムを実装したキャンパスモデル

①リアルとバーチャルの多重空間

- ・大学の研究内容である AI・IoT 及び教育 DX の導入・活用を可能とする戦略的な施設整備を実施し、「AI×ものづくりで未来をつくる」ための教育研究環境の最適化に取り組む。
- ・現実空間（リアル）と AR・VR 技術による仮想空間（バーチャル）それぞれを充実させ、それらが融合することによる相乗効果を享受できるキャンパスを目指す。
- ・床・壁・天井を使った、デジタル技術によって生み出されるバーチャルな世界と重なる空間や、多様な大学利用者が国内・海外の学生・研究者たちと気軽にコンタクトできる拠点を、キャンパス内の様々な場所に設けることで、イノベーション創出の可能性も大きく広がり、現実の大学生活の上でバーチャルな要素が自然と重なったキャンパスを実現することができる。

<キャンパス全体>
充実したネットワーク環境

<中間階（既存建物も含む）>
大学利用者、特に学生たちが自由にいつでも利用することの出来る居場所となる様々な空間を整備



<地上レベル>

屋内外を隔てる壁や用途を固定化する要素をできるだけ排除し、開けた視界や移動の自由、柔軟な空間を確保し、キャンパス全体でバーチャル要素と呼応可能な空間を展開する

大型実験室など、閉じるエリアも検討する

図：キャンパス内に散らばったリアルとバーチャルの多重空間

②自由度の高いキャンパス空間

- ・ 現実空間であるキャンパス全体のシームレス化を図るため、可能な限り地上レベルを固定する要素（建物の壁、固定的な用途の空間、植え込み、掲示板、駐輪場など）を取り除く。
- ・ 共用空間やピロティなどの通り抜け空間と、固定家具のない講義室等、用途変更可能な機能を地上レベルに配置することで、一般の施設整備より短い周期でもキャンパスの状況に合わせて変化可能な「場」を提供する。
- ・ 用途が固定されない共用空間は、季節や天候に呼応した滞留スペースや動線になり、イベントなどの短期的な要素との連携も柔軟に対応可能とする。
- ・ 実験系施設やセキュリティ対応など、必要に応じて閉じるエリアを設定することで、メリハリのある教育・研究環境を整備する。

1) 活動の可視化

視界が開けることにより、移動の自由度が上がり様々な体験を生み出す。

2) 交流の誘発

交わることを意識した空間配置や動線計画により、多様なステークホルダーの交流の「きっかけ」となる。

3) 自由度の高い空間の確保

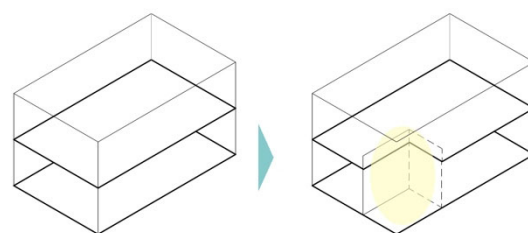
必要とされる環境の変化に素早く対応が可能な自由度の高い空間を創出する。



③立体的に展開する共創拠点 中間階における取り組み

1) 建物内に小さな工夫によって生み出す、教育・研究環境に密着した「共創」の場

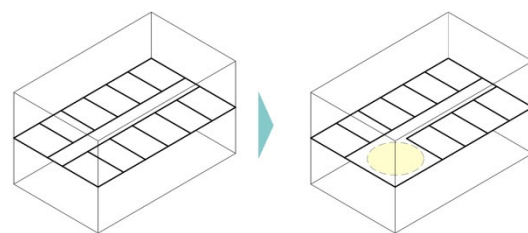
- ・ 新営建物だけでなく、大規模改修時や修繕等で既存校舎内に少し手を加え、大学利用者、特に学生たちが自由にいつでも利用することの出来る居場所となる様々な空間を整備する。
- ・ 施設利用実態調査のデータベース化と分析により、スペースの最適化を行うことで、多目的に使用できるコモンスペースやアメニティの充実を図る。



2フロアをつなぐ立体的なコモンスペース

2) リアルとバーチャル両方でつながる、拡がる

- ・ 日常的に滞在している空間に共用スペースを整備することで、小さな規模で地上レベルと同様な効果を誘発する。
- ・ 小さな拠点は学生の居場所を提供するだけでなく、バーチャルでつながる拠点にもなる。



フロアの一部を開放したコモンスペース

2. キャンパスマスタープランの役割と基本姿勢

2-1 キャンパスの計画的整備の必要性

- アカデミックプラン、本学の理念と UEC ビジョン ～beyond 2020～、経営戦略及び中期目標・中期計画を踏まえた、教育・研究環境の質的充実、施設の長寿命化に伴い老朽化する施設の安全性の確保、環境への負荷の低減、地域との連携強化
- 統一されたルールがなく整備されたことによる、敷地の有効活用の視点を欠いた建て詰まり現象や利用者の視点を欠いた調和のとれないキャンパスの改善
- 新規の施設整備に主眼をおいた従来の「施設長期計画」や「インフラ長寿命化計画（個別施設計画）」から、既存の資源を活かし、学生・教職員をはじめ、社会の多様なステークホルダーの様々なニーズに対応する、教育研究活動の基盤となるキャンパス全体の整備・活用を図るキャンパスマスタープランを策定し、長期的視点に立った計画的な整備

2-2 キャンパスマスタープランの役割

1. 大学の将来的な方向性と教育理念を基礎として、大学の戦略構想やアカデミックプランの実現を、物理的環境や施設の側面から支援していくとともに、大学のブランドイメージを牽引するような立地環境を活かしたキャンパス空間の将来像を明らかにする。
2. 大学を取り巻く社会情勢の変化に柔軟に対応しながら、社会連携・地域連携の場を明示することにより、次代を生き抜くことのできるキャンパス整備の基本方針とキャンパス空間の基本的骨格を明らかにする。
3. キャンパスライフの舞台として学内外の関係者が共通認識を持てるキャンパスの将来像を示し、学生に選ばれようとする大学のブランドイメージを発信できるキャンパスに更新・再編していくための方向性を明らかにする。
4. 次代のニーズに応えられる教育・研究環境の整備水準を設定し、それを実現するため、キャンパスの更新・再編のための手立てを示す。さらに、共同研究・受託研究の推進に寄与する社会連携・地域連携の場を明示することで本学がハブとなり、学生、教職員、卒業生、産業界、地域住民、国や地方公共団体などの多様なステークホルダーによる交流の活性化を図る。
5. 長期に渡り建物やオープンスペース等の質の高いキャンパス空間を合理的に保全・維持するための日常的なマネジメントの指針を示す。さらに、施設整備の計画と整合の取れた中長期的な修繕計画を立案し実施するためのベースとなる。
6. キャンパスの整備への投資に対して、関係者等へ必要性・緊急性をわかりやすく提示し、大学の資産に関わる継続的な意思決定に対して適切な中長期的な方向づけを与える枠組みを形成する。
7. 本学の特性や特色を活かしたイノベーション・コモンズ（共創拠点）を実現し、社会改革のプレイヤーの先陣をきり、他大学等にも波及・転用することにより、特色ある競争拠点整備に寄与する。






3. キャンパスの現況と課題

3-1 電気通信大学の現況

大学の施設・環境について

本学には、京王線調布駅から約0.5km（徒歩5分）の位置に調布キャンパスと100周年キャンパスがあり、このメインキャンパスから1.5km（徒歩約20分）の位置には屋外運動附属施設として多摩川運動場がある。さらには教育・研究及び宿泊実習等に利用されている菅平宇宙電波観測所（長野県上田市）や浜見寮（神奈川県藤沢市）を保有している。



	調布キャンパス		多摩川運動場
所在地	東京都調布市調布ヶ丘		東京都調布市多摩川
敷地面積	115,433㎡		38,187㎡
建物面積	建築：35,865㎡、延床：140,162㎡		建築：572㎡、延床：553㎡
構成員	5,270人		—
			
	菅平宇宙電波観測所	浜見寮	100周年キャンパス
所在地	長野県上田市菅平高原	神奈川県藤沢市辻堂東海岸	東京都調布市小島町
敷地面積	20,513㎡	3,190㎡	10,982㎡
建物面積	建築：722㎡、延床：1,454㎡	建築：330㎡、延床：450㎡	建築：3,959㎡、延床：16,677㎡
構成員	—	—	426人
			

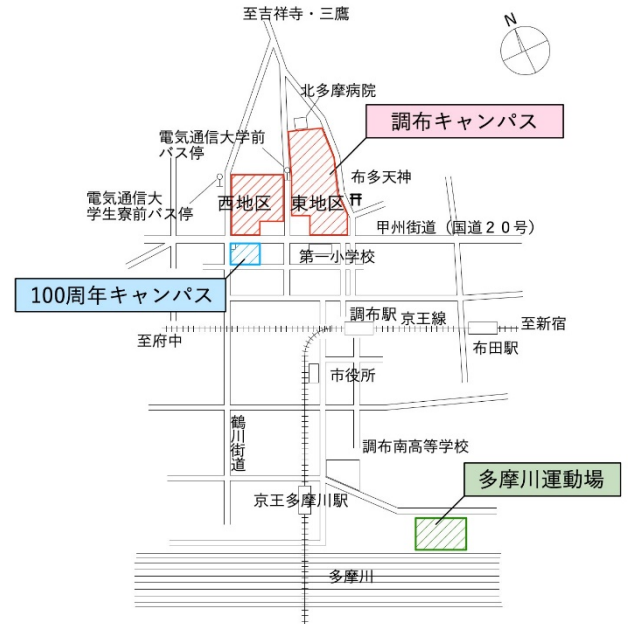
各キャンパスの基本情報

調布キャンパス及び周辺キャンパスの現況と課題

調布エリアのキャンパスは、調布キャンパスと100周年キャンパス、多摩川運動場で構成され、大学施設は調布キャンパスに集約し、100周年キャンパスには共同研究施設（UEC アライアンスセンター）や混住型学生宿舎、職員宿舎などが配置されている。多摩川運動場は、調布キャンパスから徒歩で約20分、自転車で約5分の距離にあり、体育授業が行われる他、様々な課外活動の場としても使用されている。

メインキャンパスである調布キャンパスにおいては公道を挟んで西地区、東地区で構成され、両地区合わせた敷地面積は115,433㎡、建物保有面積140,162㎡を保有し、そこで活動する構成員（学生、教職員、留学生）は約5,300人にのぼる。

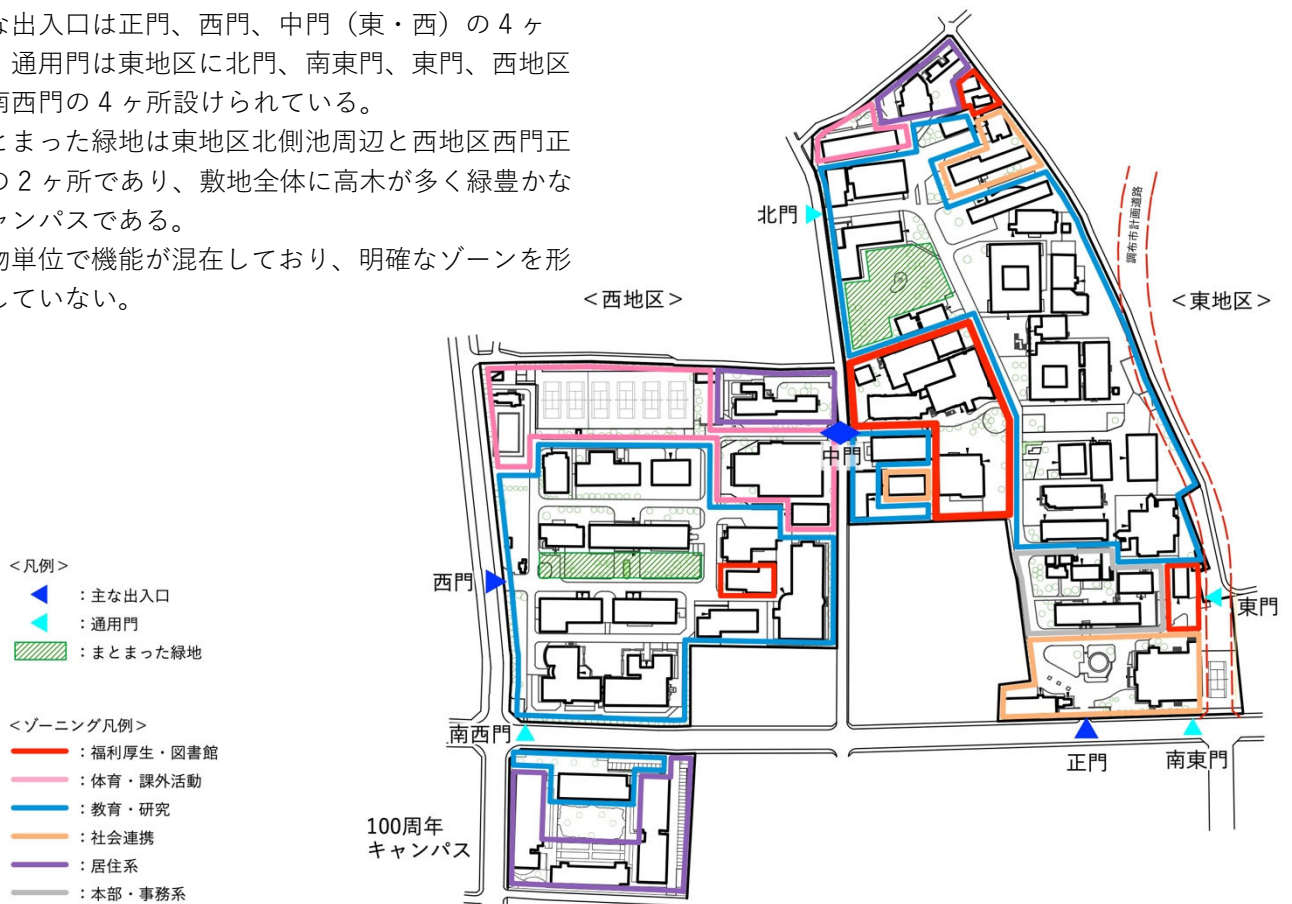
調布キャンパスと多摩川運動場の移動については、今後安全性の向上やIoTを活用した地域交通機関との連携等、研究対象となる可能性も含め検討する。



調布エリアのキャンパス案内図

調布キャンパスの現況ゾーニング

- ・ 主な出入口は正門、西門、中門（東・西）の4ヶ所、通用門は東地区に北門、南東門、東門、西地区に南西門の4ヶ所設けられている。
- ・ まとまった緑地は東地区北側池周辺と西地区西門正面の2ヶ所であり、敷地全体に高木が多く緑豊かなキャンパスである。
- ・ 建物単位で機能が混在しており、明確なゾーンを形成していない。



3-2 キャンパスの課題

■全体構成

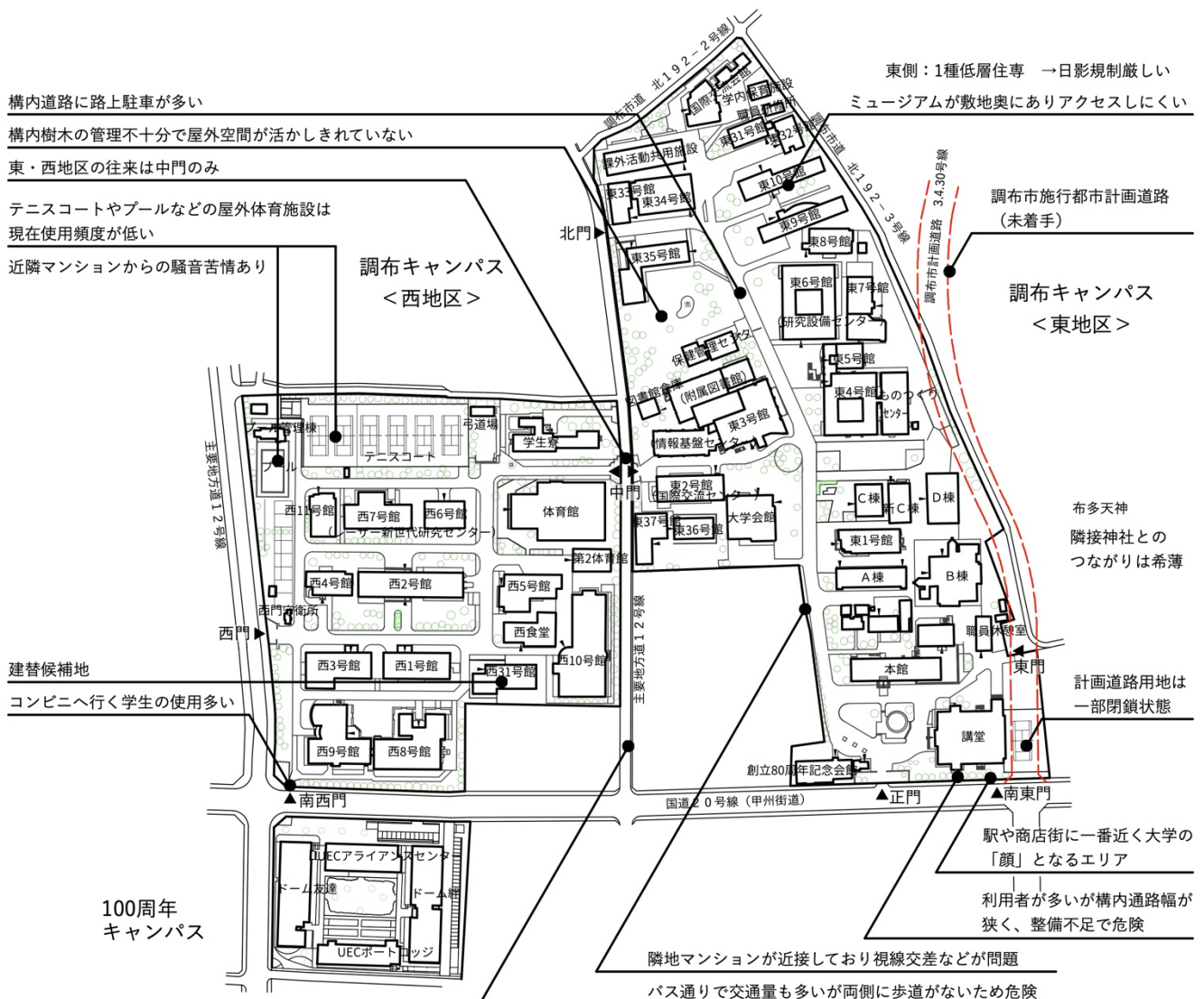
- ・公道によりキャンパスが東地区と西地区に分断されており、東西地区の交流の活性化に支障が生じている。
- ・通用門周辺の通路は整備や照明不足等の問題がある。
- ・統一的なルールがないため、配置計画やデザインが建設時によって異なり、わかりにくい。
- ・本学を象徴する建物やスペースが不足している。

■コモンスペース

- ・学生が自由に使用できるスペースがわかりにくいため、活用されていない。
- ・屋外空間のコモンスペースが使いにくく活用されていない。

■構内道路

- ・キャンパス全体に歩車が混在しているため、歩行者の交通量が多い場所や道幅が狭い場所は危険な状態となっている。
- ・バリアフリー化が不十分である。



■緑地・植栽

- ・倒木リスクのある既存樹木に対して、危険樹木調査により適切な対応がなされているが、上手く活用できていない。

■屋外体育施設（テニスコート・プール）

- ・使用頻度を確認し、スペース有効活用の検討が必要である。
- ・多摩川運動場と機能が重複していれば集約を行う。
- ・近隣から騒音苦情への対応策が必要である。

4. キャンパス整備の基本方針と戦略

4-1 キャンパス整備の基本方針

①大学のイメージ形成に資する、自立的かつ連続的に進化するキャンパス

本学の専門性や特色を活かし、AI・IoT、情報及びネットワーク等の卓越した先端技術を駆使し、ユニークかつ最先端の研究成果や、そのプロトタイプをキャンパス内に実現し、異分野の研究者が連携・協力してイノベーションを図ることができ、大学独自の伝統やアイデンティティを有形無形に表現したキャンパスづくりを進める。大学のミッション（社会的役割）とアイデンティティを体現したキャンパスとするため、教職員、学生が学習研究活動やキャンパスライフを通して「分かち合い」と「つながり」を实践できる場を創出するとともに、その活動を通して生み出す「新たな価値」を地域社会に、さらには世界に発信していくためのキャンパスづくりを行う。

- ・大学の戦略を推進するキャンパス

②快適な学園生活の場としての交流が生まれるキャンパス

研究分野を越えた多様な出会いや交流が生まれる空間をキャンパスコモンとして屋内外に整備する。学生にとってのキャンパスコモンは、その新しい関係性や多様な交流機会を通じた豊かな人間性を育むことができる場所であり、日常的な自学・自習の場として、また、キャンパスライフを豊かにする様々な活動の受け皿となる空間である。このように、キャンパスコモンは豊かなキャンパスライフを創出するための基盤的な空間であり、キャンパス整備の重要な要素であるため、大学キャンパスとしての品格を備えた空間とする。屋外のキャンパスコモンについては、都心にあっても自然を感じられる、本学のイメージ形成につながる空間としていく。

- ・調和の取れたキャンパス景観の形成
- ・多様な利用者の視点に立ったキャンパス環境の充実
- ・立地特性や地域資源を活かしたキャンパス
- ・屋内外の多様なコモンスペースの創出（プレイスメイキング）
- ・歩行者にやさしいウォークアブルキャンパス
- ・キャンパスの分かりやすさとつながりの向上

③時代の変化に柔軟に対応できる教育・研究環境を創出するキャンパス

学修や研究の見える化（教育DX）や、様々な自学・自習が可能な環境づくりによって学生の学習意欲を刺激するとともに、キャンパス全体が情報交換、知的交流のできる学習空間となるよう整備を進めていく。研究環境においては、教員の室と学生の室が分断された、画一的な研究空間を改善するため、教員室、共同資料室、院生研究室等を有機的につなげ、クロスオーバーした価値を創出する研究環境づくりを進める。

- ・持続可能な土地利用、骨格形成、ゾーニング
- ・既存施設の高度化・多様化など教育研究活動に対応した計画的な整備
- ・多様なラーニング環境に対応した学習空間づくり
- ・フレキシブルな施設整備
- ・長期的視点に立ったキャンパスのマネジメント

④教育・研究・地域貢献の実践・実習フィールドとしてのキャンパス

地域や社会の課題に応えた専門分野における教育・研究・地域貢献の実践・実習フィールド（リビングラボラトリー）としてキャンパスを積極的に活用するとともに、その活動の“見える化”を積極的に推進し、本学のキャンパスの認識を高める。

- ・キャンパスの環境資源、空間資源、活動資源の有効活用
- ・多様なステークホルダーとの相互交流・連携・協働を促進するキャンパス
- ・都市のスケールモデルとしてのキャンパスにおける実証実験、モニタリング

⑤サステイナブルでレジリエントなキャンパス

豊かな自然環境を保全・強化する等、地域の生態系の再生・向上、SDGsの目標達成に資するとともに、本学が掲げる「カーボンニュートラル推進計画」に従う教育研究活動及び大学運営による省エネルギー対策やCO₂総排出量の削減、本学が研究開発を進めている都市型円筒形太陽電池等の再生可能エネルギーの有効活用、既存建物のリノベーション、計画的な建物更新、施設の長寿命化及びZEB化等によるエコキャンパスの形成を図る。教育・研究機関としての環境学習の充実・発展を図ると同時に、3R（Reduce：廃棄物発生抑制、Reuse：再利用、Recycle：再資源化）等、環境に優しい学園生活スタイルを実践し、循環型社会の形成に資するとともに、災害に強いキャンパス整備を推進する。

- ・歩行者にやさしいウォークアブルキャンパス
- ・自動車の利用を抑制するキャンパス
- ・だれもが利用しやすいキャンパス（ユニバーサルデザイン）
- ・災害に強いレジリエントなキャンパス
- ・CO₂の排出を最小限に抑えるゼロカーボンキャンパス

⑥地域や社会と連携するキャンパス

大学のミッションの一つに地域貢献があり、本学の調布キャンパスはその立地から地域社会における知の拠点としての役割が期待されており、それに応えることが大学キャンパスの存在価値を高めることにつながっている。そのためにキャンパスを地域に開放し、キャンパス整備を通して多様なステークホルダーとの相互交流・連携・協働を促進する場と機会を提供する。さらに地域の防災拠点としてのキャンパス整備を図る。

- ・多様なステークホルダーとの相互交流・連携・協働を促進するキャンパス
- ・地域環境を構成する大学キャンパス
- ・地域再生やまちづくりにおける重要な環境資源、空間資源、活動資源
- ・大学キャンパスと周辺市街地とのつながり

4-2 キャンパスの特色となる空間要素

■CAMPUS HEART

図書館、食堂などの福利厚生施設、スポーツ施設等を配置し、学生活動や生活の中心となるキャンパスの心臓部（HEART）を形成するエリア。

キャンパスの中心骨格となり、東地区と西地区の連携を強化する場となる。

■GATEWAY EAST

調布駅や商店街に近く、大学の「顔」となるエリア。

大学と社会、多様なステークホルダーを積極的に結びつける機能を担う。

ホール、ミュージアム、カフェ、セミナー室など外部利用を視野に入れた機能や、リエゾンオフィスなどを移転し、集約化する。

■GATEWAY WEST

大学のもう一つの「顔」となる研究の場に実社会を取り込むエリア。

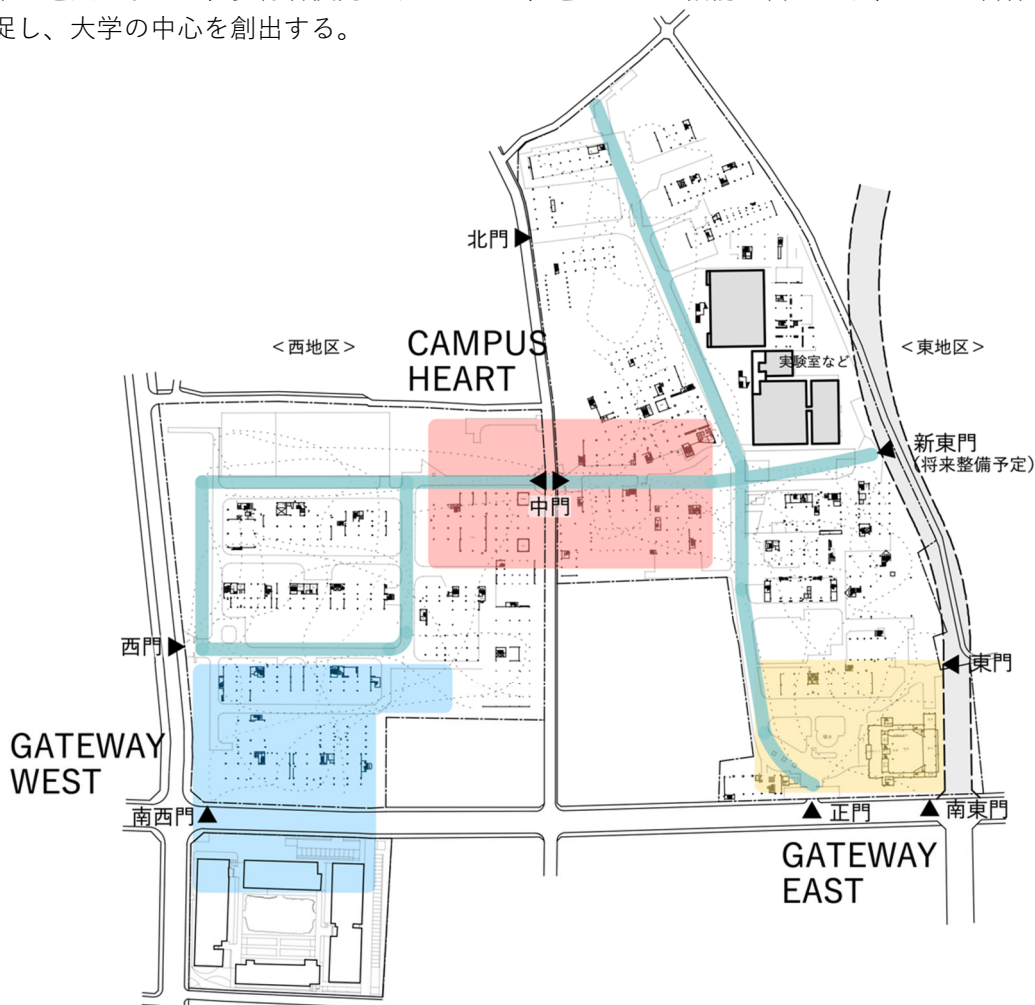
甲州街道、さらには道路を挟んで UEC アライアンスセンターに面している立地を活かし、周辺社会を巻き込んだ実証実験の場を配置する。

一般参加型の実験スペースや地域産業と共用できる工房、試作品の体験スペースなど、スピーディに研究成果と社会を結ぶ。

■キャンパスモール

キャンパスの骨格軸として、東・西地区を貫きキャンパス全体の背骨となる。

車両・自転車の進入を禁止し、歩行者優先とすることで、道としての機能に留まらず、モール自体が活動の場となることを促し、大学の中心を創出する。



5. フレームワークプラン

5-1 骨格形成とゾーニング

骨格形成とゾーニングの基本方針

①街との関係、キャンパスの魅力を際立たせる土地利用

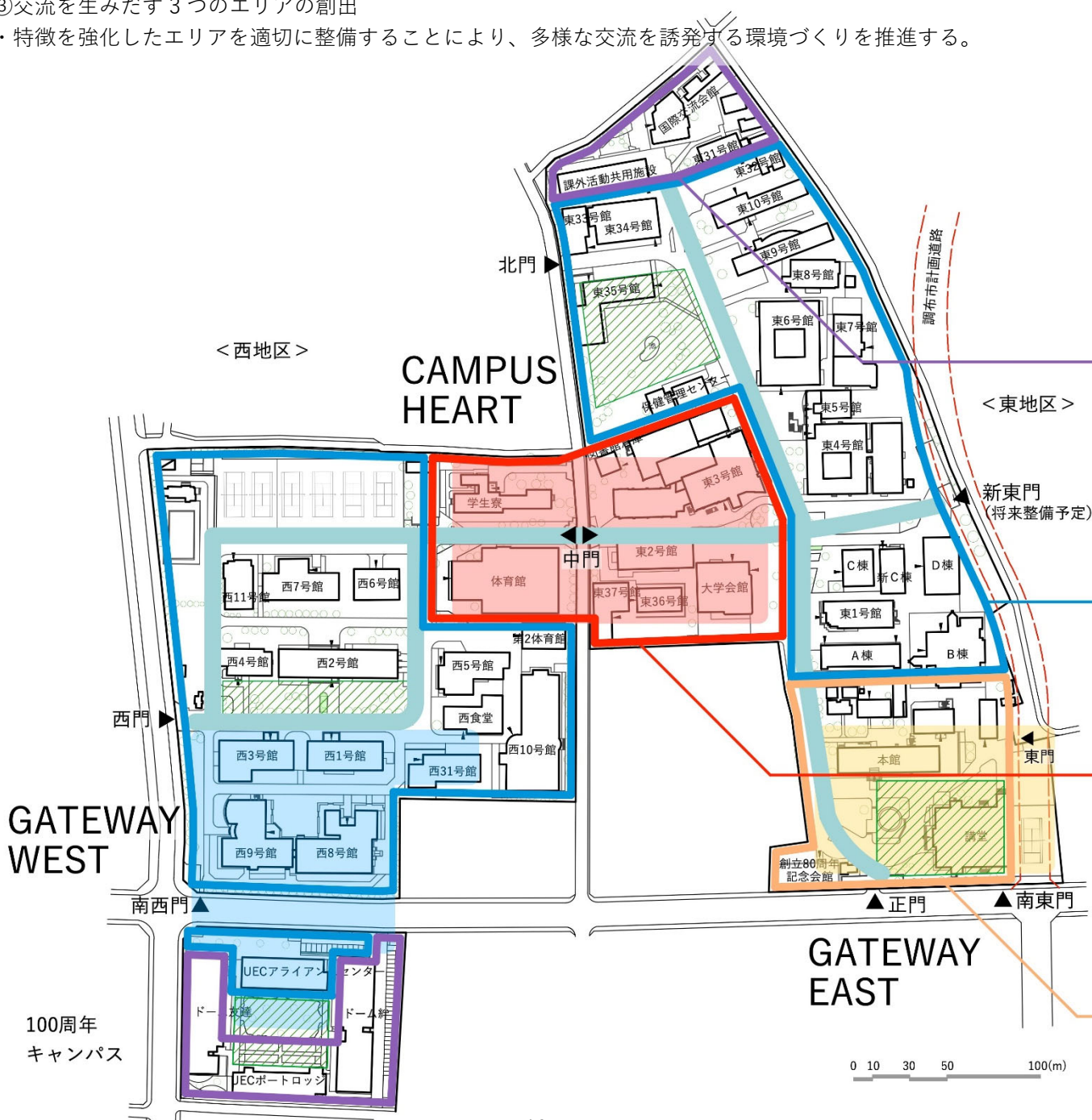
- ・都内で主要幹線道路に隣接し、さらには最寄駅に近い立地を活かし、街と呼応した土地利用を展開し、多様な学習体験と豊かなキャンパスライフを育む質の高い高等教育環境を形成する。
- ・今後のキャンパス発展において基軸となるものを整理し、既存の緑豊かな外部空間も取り込んだ大学らしい学びの場として空間形成を図る。

②機能配置の再編と骨格形成による明快な全体構成







- ・関連機能の集約化と周辺環境に合わせたゾーニングを行うことでキャンパス全体の構成と役割を明快にし、機能強化と最適化を図る。
- ・キャンパスモールを整備することにより東地区、西地区のつながりを強化し、1つのキャンパスとして全体を感じられる骨格を形成する。

③交流を生み出す3つのエリアの創出

- ・特徴を強化したエリアを適切に整備することにより、多様な交流を誘発する環境づくりを推進する。



■骨格形成

	キャンパス モール	キャンパス全体の構成を担う骨格軸。 東地区は「十字形」、西地区は「口の字形」の骨格を形成する。
	CAMPUS HEART	豊かなキャンパスライフの中心となり、東地区と西地区の連携を強化する新たな魅力となる環境を整備する。
	GATEWAY EAST	大学の玄関口となり、地域や企業との「出会いの場」となる環境づくりを推進する。都市計画道路に伴い屋外空間を整備する。
	GATEWAY WEST	100周年キャンパスと連携し、社会や企業と大学の研究活動を結びつけ、発展発信していく環境を整備する。
	キャンパス ゲート	正門、西門を、大学のイメージを体現した空間へ改修する。 都市計画道路完成時に、新たな玄関口となる新東門を整備する。
	広場・緑地	既存の広場や樹木は交流機能や緑の保全に向けて適切に維持管理していく。

■ゾーニング

D.C.&I.実証ゾーン

- ・キャンパスライフを支え多様性やコミュニケーションの基盤となるゾーンとして、学生寮、国際交流会館、学内保育施設、職員研修所の4棟及びその周辺低層施設を集約・複合化し、一体的な改築整備を計画。センターゾーンを含め、地域や国境を越えた多種多様なステークホルダーが、共創・交流・学修・教育・研究活動を行う先進的な整備を図る。
- ・官民連携の多様な PPP/PFI 事業として、これまでの機能に加え、多種多様な収益施設機能の導入を検討する。

教育・研究ゾーン

- ・時代や社会のニーズに対応した専門性の高い教育・研究活動を維持するために、研究の場として、フレキシブルな空間を確保し、機能の継続的な更新を図る。
- ・施設整備とともにコモンスペースや広場の創出等で、閉鎖的になりがちな研究・実験の場に交流や潤いを付加していく。

センターゾーン

- ・学生、教職員、企業関係者など大学内外の全ての人が利用する、キャンパスライフの中心かつ社会との接点となるゾーンとして、豊かな環境づくりとグローバル化を推進する。
- ・東地区と西地区の連携を強化し、屋内体育施設、課外活動施設を備え、スポーツ・文化活動等を通じた交流の場として活用していく。
- ・D.C.&I.実証ゾーンと共に官民連携の PPP/PFI 事業を検討し、多種多様なステークホルダーが、共創・交流・学修・教育・研究活動を行う先進的な整備を図る。

社会連携ゾーン

- ・調布駅からキャンパスへのアクセス動線である国道20号（甲州街道）に面し外部に対しての「キャンパスの顔」となることから、地域や社会との連携を深める環境を整備し、学生や来賓、周辺住民へ大学の魅力を発信していく。

5-2 交通計画

交通計画の方針

①各種交通動線の確保

- ・ 歩行者、自転車、自動車、それぞれに安全で効率的な動線を確保するとともに、歩行者動線との連絡を図る。

■歩行者の主要動線（原則として歩行者専用）

キャンパスモール

■自転車の主要動線

歩道状空地内の自転車動線から駐輪場へのアクセス

■自動車の主要動線

外周車道

（オートバイは東西両地区とも原則入構禁止とする）

②自由で安心・安全に移動できるウォークブルキャンパス

- ・ 東地区は十字形、西地区は口の字形の骨格軸であるキャンパスモールを中心に、わかりやすく安心・安全に目的地へ到着できる歩行者動線ネットワークを形成する。
- ・ 地上レベルはピロティやオープンスペースなどの通り抜け空間を設け、自由に移動できる通路を展開する。
- ・ 歩行者動線とその他の交通動線との不都合な交差をできる限り解消していく。



歩行者

①キャンパスモール

- ・ 南北方向の骨格軸として正門から北側へ続くモール
- ・ 東西方向の新たな骨格軸となり、西地区、東地区をつなぐだけでなく、都市計画道路完成によって新たに整備される予定の新東門からセンターゾーンへ導く役割を担う。また、外周車道、駐輪場と両端部で接続することにより、全ての動線の連携を図る。
- ・ 歩行者専用と位置づけ、自転車の進入も禁止する。

②半屋外空間と通り抜け空間

- ・ ピロティやオープンスペースなどの通り抜け空間を設け、建物があっても地上を自由に移動できる通路を展開する。
- ・ 歩行者専用と位置づけ、自転車の進入も禁止する。

③歩道状空地

- ・ 周辺公道の歩行者環境を改善し、安全性を確保する。
- ・ 調布市と協力しながら、周辺環境の向上を目指す。



自転車

①一般自転車動線

- 原則として、自転車でのキャンパス内の走行は禁止し、公道から駐輪場へのアクセスのみを許可し、駐輪場は、東地区及び西地区の各1ヶ所に集約して整備することを検討する。

②共用自転車

- 多摩川運動場への移動手段として、共用自転車を設置し、設置場所は両駐輪場に加え、A、Bも検討する。ただしキャンパス内への進入は禁止とする。

③歩道状空地

- 敷地境界を整備する際に設置予定の歩道状空地には自転車路を設け、周辺環境の向上を図るだけでなく駐輪場へのアクセス路としても利用する。



自動車

①一般車両動線

- 来賓、教職員、学生等の一般車両の主要動線は、西駐車場門、新東門からアクセスし、都市計画道路完成時に敷地の外周部に沿って整備する車道とする。
- 原則として、学生の自動車通学は禁止し、教職員の自動車通勤については、環境への負荷も考慮し推奨しない。

②サービス車両動線（納品・点検・工事業者等）

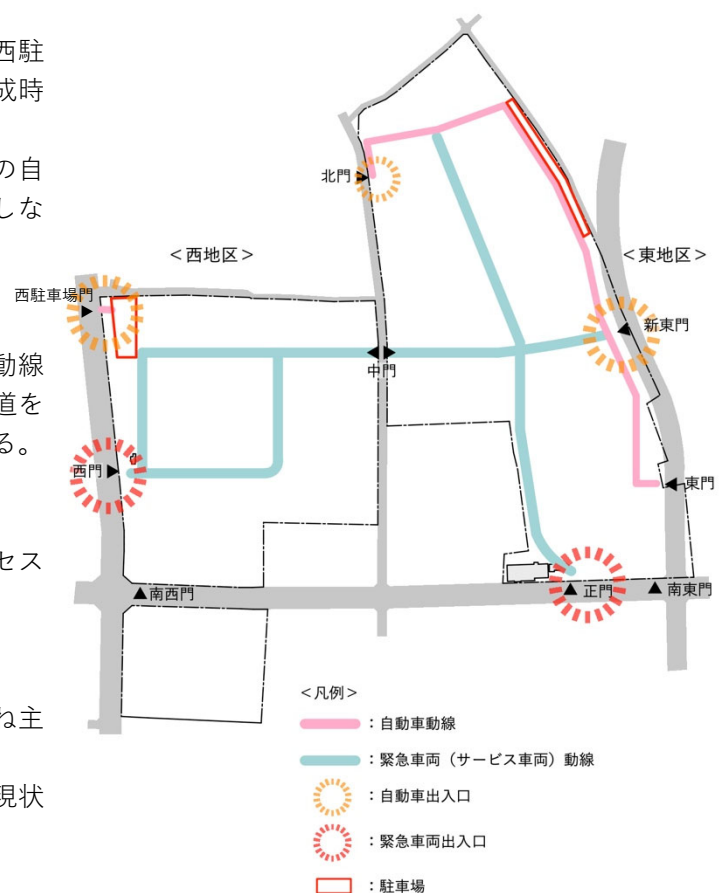
- 生協や食堂等の配置状況を踏まえ、サービス車両動線についても原則として、一般車両等と同じ外周車道を主要動線とするが、規制を設け構内走行を許可する。

③緊急車両動線（救急・警察・消防等）

- 緊急車両は、正門、西門、新東門、北門からアクセスし、外周車道に加えキャンパスモールを利用する。

④駐車場

- 一般車両用駐車場やサービス車両用駐車場は、概ね主要動線である外周車道沿いに配置する。
- 必要最低限の需要に対応するという考えのもと、現状の駐車台数を維持する。
- 周辺環境に配慮した整備とする。
- バリアフリーネットワークの形成、建物整備と併せて車道沿いに身体障害者用駐車施設を整備する。



5-3 建物計画

①共創空間へ対応する空間整備

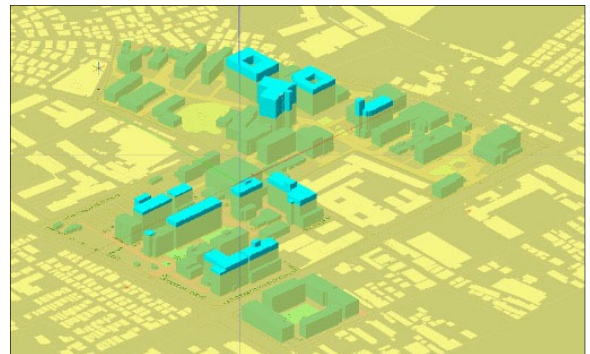
- ・ 新営、改築、改修にあわせ地上レベルの開放と用途の再編を推進し、段階的に屋内外の連携を強化した空間をつくりだす。
- ・ オープンスペースの整備を計画的に行う。

②老朽化、機能再編を踏まえた更新計画

- ・ 周辺建物と連携した関連機能の集約化を進め、各建物の特長強化と教育・研究環境の最適化を図る。
- ・ 前記により、分散した小規模建物、老朽化した建物の改築、取り壊しを進め、教育研究環境の改善と、保有面積の最適化を図る。
- ・ 建物取り壊し後の跡地や屋外体育施設の再編跡地を有効活用していく。

③高さ制限への対応

- ・ 平成 18 年に制定された「調布都市計画高度地区」により、25m 高度制限による既存建物の法的対応と緑豊かなキャンパス景観を維持した質の良い教育・研究環境の整備に必要な敷地の高度利用を図るため行政協議を含め対応を検討する。



高さ 25m を超え既存不適格となっている建物



5-4 インフラ計画

インフラ計画の方針

- ・ 時代や社会の変革に応じた多様なニーズに柔軟かつ持続的に対応可能なインフラを構築する。
- ・ 再生可能エネルギーの活用など、多様なエネルギー源の確保を検討し、エネルギーの安定供給を目指すとともに、給排水・ガス・情報系を含むライフラインや共同溝整備を推進する。
- ・ 自然災害発生時に、地方公共団体及び地域住民等に貢献できる防災・減災機能を充実させる。

①共同溝の整備

- ・ 既存の共同溝については規模や老朽化を調査し、新設共同溝とあわせ、キャンパス全体を網羅するインフラを構築し、災害時の早期復旧、将来のニーズに柔軟に対応可能な計画とする。
- ・ 共同溝の配置は、建物配置計画と大きく関わるため、骨格軸となるキャンパスモールと合わせ整備することが重要となる。

②エネルギーセンターの整備

- ・ 既存エネルギーセンター（特別高圧受変電設備）の更新への備えや将来の拡充、東西地区間の連携強化に対応するため、センターゾーンの建物建替時には、先行してバッファーとなる施設整備を推進する。



5-5 環境・エネルギー計画

環境・エネルギー計画の方針

- ・「カーボンニュートラル推進計画」に則り、省エネルギー・創エネルギーの取組を計画的に実施し、エネルギーの地産地消・小規模自立型分散システムの確立を図る。
- ・建物や設備の長寿命化、機能の更新・再編と共に教育研究環境の最適化を図り、効率の良いスペースとエネルギーの活用を推進する。
- ・既存樹木の保全やまとまった緑地を確保することにより、キャンパス内の屋外環境向上に加え、地域の生態系の再生・向上を図る資源としても活用していく。
- ・キャンパスをカーボンニュートラルの研究・実現の拠点と位置づけ、研究成果を積極的に活用する施設や研究設備の整備を推進する。

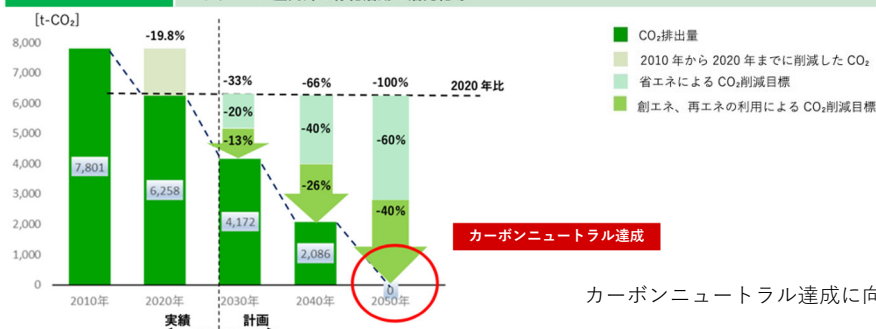
①カーボンニュートラルに向けた教育・人材育成・研究・社会実装

- ・教育・人材育成においては、教育段階に応じたカリキュラムの導入による異なる専門技術の融合、教育成果の社会実装、自発的な連携プロジェクト等への参画及び社会改革を牽引する人材の輩出を強力に進め、地球規模でのカーボンニュートラルの概念、社会生活における必要エネルギー量と現時点での創出方法、技術の経済性・社会適応性等に係る教育達成目標値の設定と、その達成に向けた計画を立案して教育運営のマネジメント体制を確立する。
- ・研究・社会実装においては、「ユーザーが自ら形成する小規模自立分散システム」による地産地消と自立分散統合を実現する要素として、カーボンニュートラル実現に資する領域の研究を推進し、さらにそれらの研究から生み出される技術を統合して、最適化を図りながら新陳代謝を可能とするエネルギープラットフォームを確立するため、キャンパス内での実践等を通じて実証検証を強力に進める。

②カーボンニュートラルに向けたハード面・ソフト面の取組

- ・ゼロカーボンキャンパスを目指し、省エネルギー・創エネルギーに関する以下のハード面及びソフト面の取組を計画的に実施する。
- ・ハード面：建物のZEB化、太陽光発電等の創エネルギー設備導入、エネルギー等の可視化、既存施設の高効率化 他
- ・ソフト面：カーボンニュートラルの講習会・研修等による意識啓発、全学的なエネルギー使用量削減、資源の有効活用と廃棄物の削減、緑化の推進 他

カーボンニュートラルに向けた分野	2010年	2020年	2030年	2040年	2050年達成
教育・人材育成	・カーボンニュートラルに貢献する先端的教育・研究成果の発信、教育カリキュラムの導入及び実施 他				
研究	・創エネ・蓄エネ・省エネ等9つの領域に関連する技術開発及び実装等				
大学運営	・「共創進化型イノベーション・commons マスタープラン」(策定中)における全体面積最適化によりZEB新営建物を立案、長寿命化させる既存建物の100%ZEB Ready改修を計画				
	・太陽光発電パネルの構造上可能な建物屋上へ100%設置				
	・教育研究建物の空調・換気・照明を高効率設備へ100%切り替え				
	・教育研究建物の外皮強化(断熱性強化)を100%実施				
	・大学全構成員へカーボンニュートラル講習会等の意識啓発を定期開催				
	・ノー残業デーの徹底、クールビズ及びウォームビズの前後1ヶ月延長による電力等削減				
	・ペーパーレス化及び資源リサイクルの徹底による廃棄物処分量の50%削減				
	・キャンパス屋内外の緑化活動の活発化等				



5-6 防災計画

防災計画の方針

- ・ 大規模災害における学生教職員の安全確保、避難場所確保と機能の充実を建物整備の最優先事項とし、老朽化対策と共に計画的に検討する。
- ・ 電気・水道・ガス・情報等のインフラ整備を計画的に行うことで、被害の減少と早期復旧を目指し、災害に強いキャンパス整備を推進する。
- ・ 非常時においても大学の施設を有効に活用できる体制を整え、令和3年度に調布市と「災害時における電気通信大学の施設利用に関する協定書」を締結した。地方公共団体と協働し災害対策を推進していくことで、大学内に留まらず地域社会に貢献できる防災拠点としての役割を担う。

①インフラ設備の活用

- ・ 井水による生活用水の確保や太陽光電池等の創エネ設備による電気の供給、地域ネットワークに依存しない通信設備等、非常時に稼働可能な設備を適切に整備し、保有施設の有効活用を推進する。

②防災拠点としての備え

- ・ 防災設備や備蓄倉庫の整備、また災害時の情報収集と発信に対応する設備の充実を図る。



6. リーディングプロジェクト

主要整備計画

共創進化型イノベーション・commons マスタープランを実現するための、具体的かつ主要プロジェクトを計画する。

現在、西9号館において、本学が独自に構築する共創進化IoTシステムを推進し、ゼロカーボンキャンパスを目指すためのZEB Ready改修整備を実施している。(令和5年度末完成)

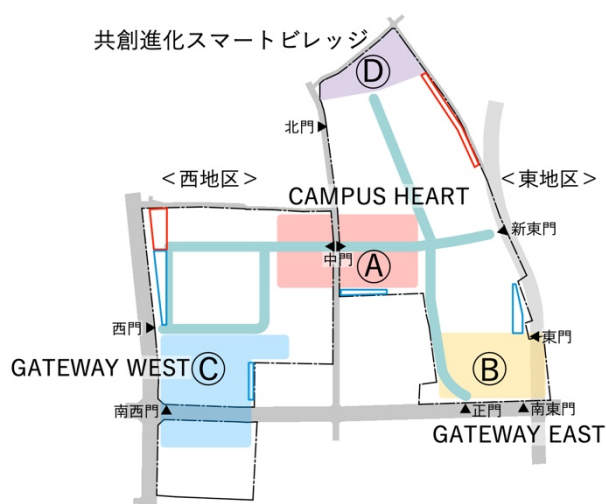
共創進化型イノベーション・commonsを推進するリーディングプロジェクトの最初のステップとして、西9号館で推進する共創進化IoTシステムを拡大展開し、本学にとどまらず他大学や社会に展開していくために、大規模な実証実験研究を行うとともに、学生・教職員だけでなく社会の多様なステークホルダーが活用できる場が必要であることから、共創進化スマート拠点となる新棟を整備する。新棟は、地上レベルを解放し、現実空間（リアル）と仮想空間（バーチャル）を融合させた様々な実証実験研究を行う場とし、ここを拠点として、キャンパス全体を共創進化型イノベーション・commonsへと転換していく。

6-1 エリア整備

- A. CAMPUS HEART 整備計画
- B. GATEWAY EAST 整備計画
- C. GATEWAY WEST 整備計画
- D. 共創進化スマートビレッジ（仮称）改築整備計画

6-2 キャンパス全体での取り組み

- E. ウォーカブルキャンパス整備計画



A. CAMPUS HEART 整備計画

学生生活の中心となるキャンパスの心臓部（HEART）を形成するプロジェクト
キャンパスの中心骨格となり、東地区と西地区の連携を強化する共創進化型イノベーション・コモンズを形成する。

Step 1：学生寮（五思寮）跡地の CAMPUS HEART 化

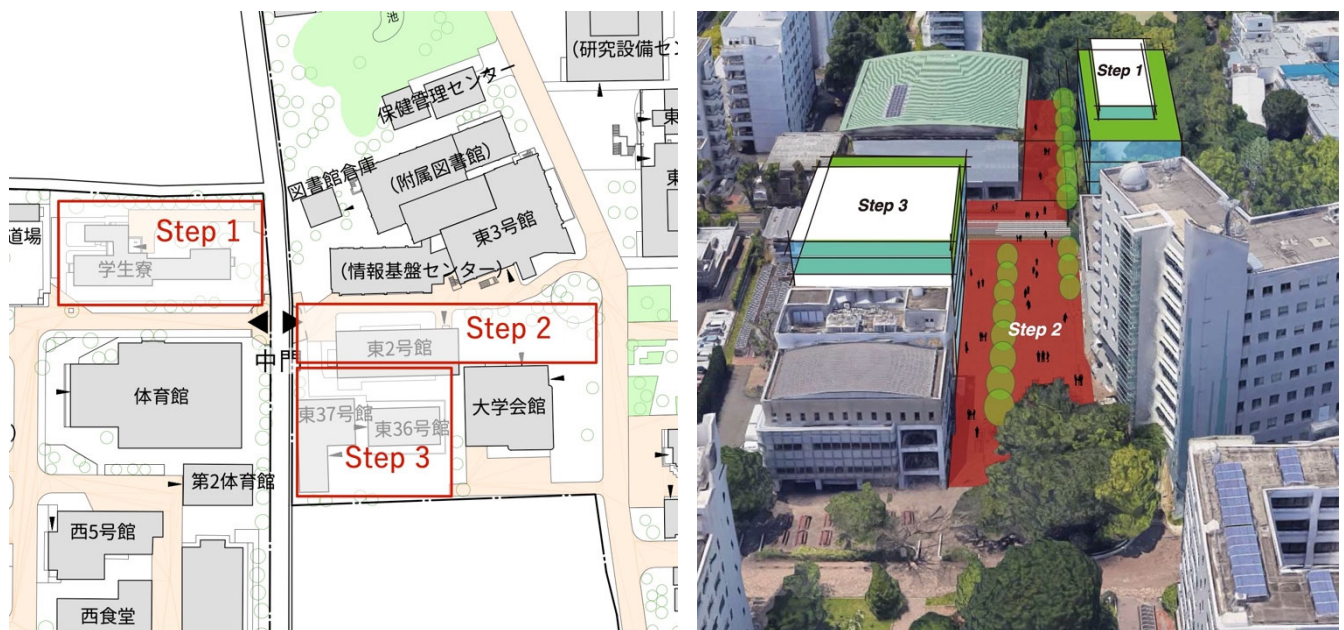
- 学生寮（五思寮 昭 54 築 延 2,235 m²）をキャンパス北側 D.C.&I.実証ゾーンへ機能移転を検討し、跡地をグローバル化に対応した共創交流スペース、福利厚生施設及び民間収益施設の導入による、PPP/PFI 等の方式で整備する。（東 2 号館国際教育センターの機能移転を含む）

Step 2：東 2 号館を取り壊し学生生活の中心に相応しい外部空間を形成

- Step 3 の事前整備として、東 2 号館（昭 44 築、延 4,021 m²）の機能を他施設に集約・複合化して取り壊し、CAMPUS HEART に相応しい共創進化型屋外空間を整備する。
- 地方道 12 号線を横断する歩行者の安全を確保するため、横断歩道の拡幅や、通過交通のスピード抑制を実現する。

Step 3：東 36・37 号館を取り壊しキャンパスライフの中心となる共創拠点を建設

- 令和 2 年補正予算で改修整備した東 36・37 号館を改築整備する。（概算要求にて、8 年後の 2030 年度を目指す）
- キャンパスの心臓部となる共創拠点を形成する。
- 図書館（東 3 号館 昭 40-平 14 築 延 14,908 m²）、大学会館（平 10 延 3,949 m²）及びサークル棟（課外活動共用施設 昭 57 延 1,783 m²）等のキャンパスライフに必要な機能の集約・複合化も視野に入れ一体的に整備する。



B. GATEWAY EAST 整備計画

電通大の顔となり、地域や企業との共創進化スマート拠点を形成するプロジェクト

Step 1 : 都市計画道路予定地を活用した地域共創コモンの形成

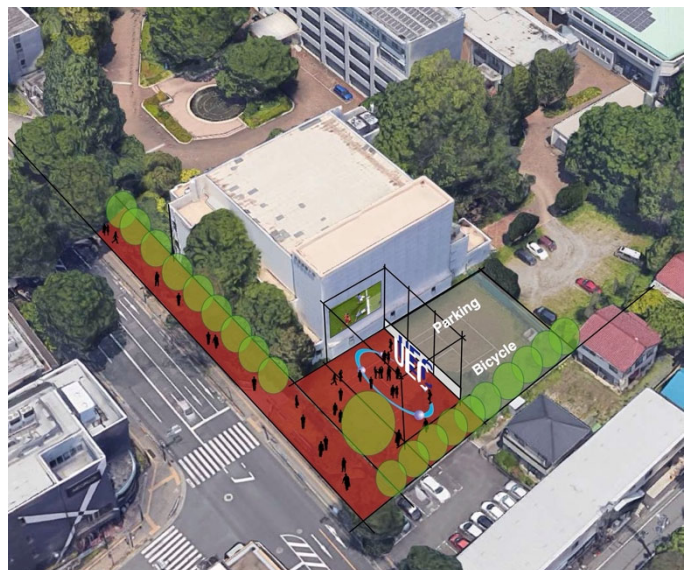
- ・都市計画道路が実現するまでの短期プロジェクトとして整備する。(自主財源+外部資金)
- ・未利用のテニスコート部分を活用して、学生・教職員・地域住民・神社参拝者が利用できる外部テラスを設置する。できれば屋根を設けて雨天時も利用できるようにする。
- ・キッチンカーによる飲食サービスを提供し、積極的に地域のオフィスワーカーの利用を促す。
- ・民間事業者への貸し出し、布多天神社との共同運営を検討し、外部資金の活用を図る。
- ・電通大の研究成果をICT技術を用いてアピールする場とするとともに、近隣の名所となることを目指す。(円筒形太陽電池の積極利用、講堂の東外壁を利用したパブリックビューイングやプロジェクションマッピングなど)
- ・駐車場・駐輪場スペースも併せて確保する。
- ・駅からのアプローチ空間として、テニスコート部分と大学内部の歩道(講堂と外部フェンス間)を積極的に地域に開き、緑の多い街路空間として整備する。

Step 2 : 創立80周年記念会館を活性化する正門周辺の共創環境整備

- ・防犯設備等の運転監視及びセキュリティ強化のため、老朽化した守衛所(昭48築、延40㎡)の改築整備を検討する。
- ・あわせて創立80周年記念会館(平12築、延1,072㎡)の改修+増築を図り、現在、東10号館に設置しているミュージアム機能を移転かつ強化して、地域・企業等社会へのアピール拠点を形成する。(創立110周年記念事業とし、増築部分への守衛所取り込みを検討する)
- ・インフラ長寿命化計画の一環として概算要求事業に加える。

Step 3 : 講堂および本館の改築整備

- ・都市計画道路完成時にあわせて講堂(昭56築、延2,282㎡)を改築整備する。(道路用地売却費)
- ・本館(昭46築、延3,973㎡)を北側に改築整備する。(概算要求+道路用地売却費)
- ・2棟の改築にあわせてGATEWAYに相応しい外部環境を一体的に整備する。(概算要求+道路用地売却費)



C. GATEWAY WEST 整備計画

西地区の共創進化スマート拠点形成プロジェクト

Step1：共創進化スマート拠点整備 「共創進化棟（仮称）改築整備」

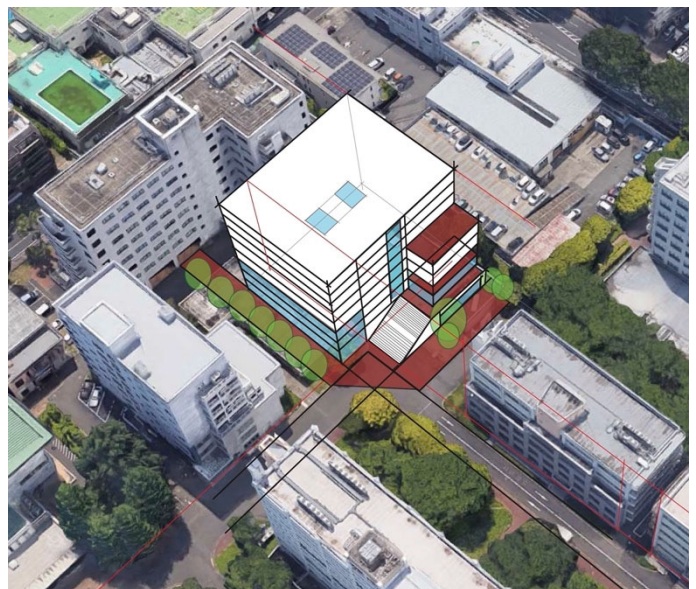
- ・西31号館（昭48築、延987㎡）、西食堂（昭54築、延470㎡）を取り壊し、跡地を活用し、共創進化スマート拠点として新棟を整備する。
- ・新棟整備は、共創進化スマート大学を実現するための最重要プロジェクトとし、令和5年度に完成する西9号館及びその外部空間の改修と連動させ、地上レベルを解放し、リアルとバーチャルが融合し、実証研究実験等多用途に活用できる場を整備する。その成果を次の共創進化スマート拠点形成に活かすことにより、キャンパス全体を共創進化型イノベーション・commonsへと転換させていく。
- ・CAMPUS HEART 形成プロジェクト Step1 と連動して、東2号館（昭44築、延4,021㎡）及び小規模建物の取り壊し、機能の集約・複合化検討を行う。（概算要求第1順位）

Step 2：甲州街道沿いの歩道空間整備

- ・国道20号線を挟み、隣接する100周年キャンパスとの連携を強化する外部空間を整備する。国土交通省や調布市等関係行政と連携した歩行者空間の拡張や地域への開放を含め検討を行う。

Step 3：西地区全体のローリング計画

- ・北側テニスコート部分やプール取り壊し跡地の活用を視野に入れ、検討を進める。

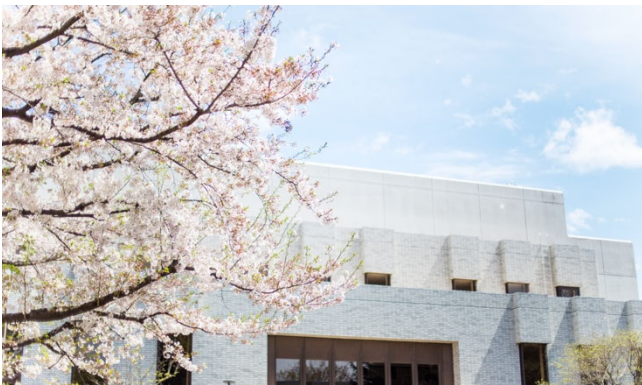


D. 共創進化スマートビレッジ（仮称）改築整備計画

地域や国境を超えた D.C.&I.実証ゾーンを整備するプロジェクト

「共創進化スマートビレッジ（仮称）改築整備」（PPP/PFI 方式を検討）

- ・ キャンパス北側の D.C.&I.実証ゾーンにおいて、学生寮・国際交流会館・保育所・職員研修所の機能を集約・複合化させるとともに、有益かつ有効な収益施設の導入等により、100%民間資金による PPP/PFI 事業化を検討する。
- ・ 国際交流会館（平 3 築 延 1,788 m²）・保育所（学内保育施設 昭 43 築 延 103 m²）・職員研修所（昭 54 築 延 136 m²）他を取り壊し、その跡地や学生寮跡地（CAMPUS HEART 形成プロジェクト Step1 と連動）に、地域や国境を越えた多種多様なステークホルダーが共創・交流・学修・教育・研究活動を行う場として、収益を伴う民間施設の導入により一体的な整備を検討し、環境や人に優しい、魅力的かつスマートな小さな社会やまち「共創進化スマートビレッジ（仮称）」を形成する。
- ・ 北側隣地が第 1 種中高層住居専用地域のため、日影規制等の制約に十分配慮する。
- ・ 接道を主要地方道 12 号線側にとれないか検討するとともに、セキュリティを加味した出入口の位置検討を行う。



E. ウォーカブルキャンパス整備計画

エリア整備と並行し、歩行者にやさしいキャンパスへ段階的に整備するプロジェクト

歩行者にやさしいキャンパスに向けて、自動車・自転車等の入構台数（駐車台数）を減らす方策を検討した上で段階的に整備を実施する。

■ 車動線の変更

<東地区>

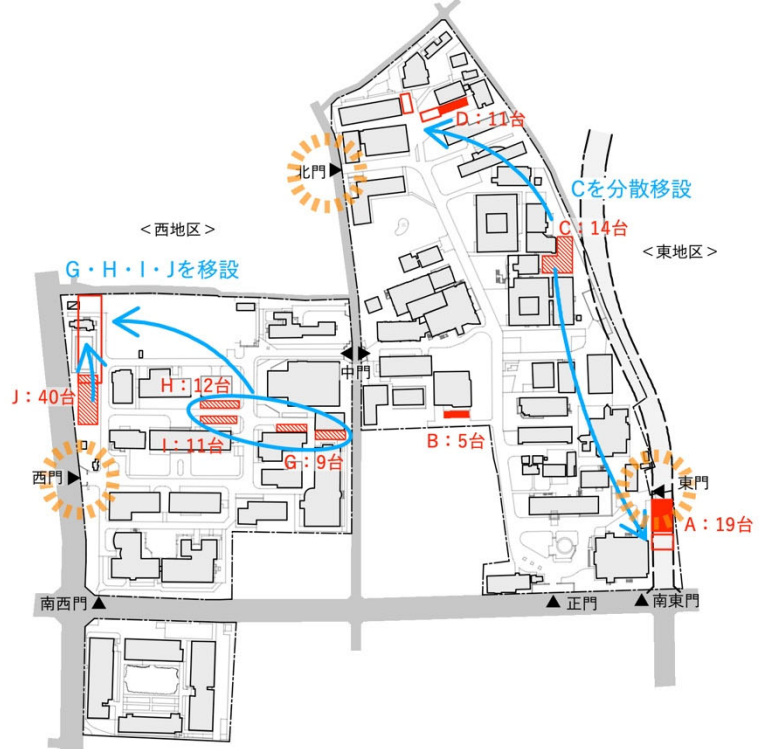
- ・北門および東通用門からの出入を検討し
C (14台) を A、D に分散
- ・A をテニスコート側へ拡張
- ・B は生協及び食堂用サービス車両のみとし、例外的に正門を利用
- ・都市計画道路完成時に外周駐車場を整備

<西地区>

- ・西地区 G、H、I、J (72台) を既存プール位置に移設
- ・出入口は西門

東地区既存駐車台数：49台 + α

西地区既存駐車台数：72台



■ 自転車動線の変更

<東地区>

- ・南門テニスコートを広場・駐輪場として暫定整備
- ・北門を利用し東地区北側に暫定整備
- ・都市計画道路完成時に外周駐輪場を整備

<西地区>

- ・西地区外周部に歩道状空地と自転車通路を整備
- ・既存駐車場Jの位置に駐輪場を整備
- ・出入口は西門

自転車登録数（学生）：760台



7. 多様な財源及び整備手法の導入

整備推進に向けて

このキャンパスマスタープランには、本学の目指す姿が謳われ、そこに向けた施設計画が展開されている。急を要する計画から少し時間を要する計画まで多様な計画が描かれている。

従来から施設整備には相当な費用を要しているが、昨今の公共建築や公共空間に対する社会的要請である「長寿命建築・環境対策・SDGs・ESG」などの精神や具体的対応を必然とすると、その費用は大きいものとなることが推測される。

本学の施設整備は文部科学省や国の施設整備補助金等を根幹とするが、本学の理念・ミッション・社会的使命を果たす基盤である姿としてのキャンパスマスタープラン（施設・屋外空間・学内道路や共同溝・エネルギーサプライのインフラ・実装すべき研究設備やDX環境）を早期に実現するために国立大学法人として可能とされている「様々な機会と多様な財源と整備手法」を有効に導入することが重要である。

キャンパスマスタープランの実現には、財源と整備手法の選択とともに効率的・効果的な整備年次計画も重要となる。地上の建築等整備と整合の取れたインフラ（特に共同溝やエネルギー・通信情報など）が計画的に整備されることが欠かせない。

上記を本学構成員全員が認識のもと、本キャンパスマスタープランを推進する。

7-1 多様な財源の導入について

文部科学省の施設整備補助金をはじめ、各省の政策的補助金の獲得を積極的に図るとともに、国立大学法人として可能な様々な以下の制度と財源を活用する。

- ・ 目的積立金・営繕費
- ・ 長期借入金や大学債
- ・ 共同研究企業など民間企業等からの寄付
- ・ 公的研究費の間接経費
- ・ 自治体からの協力
- ・ 未利用地、未利用施設などの有効活用や民間投資受入れ

7-2 PPP/PFI手法（官民連携整備手法）等による整備可能性追及について

■ 1999年に民間資金等の活用による公共施設等の整備等の促進に関する法律（PFI法）が成立し、公共建築や社会インフラの新設・更新・維持管理・運営等がPPP/PFI手法（官民連携手法）により実施され始めている。

■ 利用者や施設用途等により手法は様々であるが図3及び図4に掲げる手法がある。

■ 施設整備補助金等による従来型の整備のほか、施設用途や利用者の特性などを勘案の上、キャンパスマスタープランの整備推進に向け本学として可能な制度について導入を検討する。

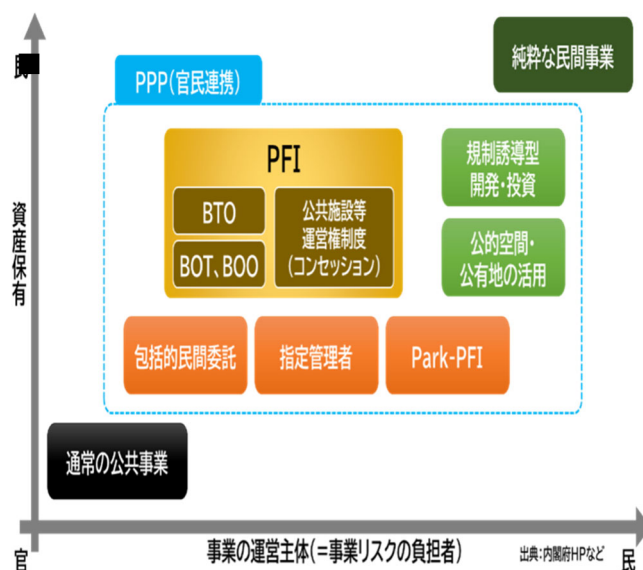


図3：PPP/PFIの概念

事業方式		内容	資金調達	建設	所有	維持管理運営
従来方式		大学が資金を調達し、施設の建設、維持管理は原則として単年度契約で分離発注し、所有権は常に大学にある。	大学	大学	大学	大学
設計・施工一括発注方式 (DB方式)		大学が資金を調達し、施設を建設、施設完成直後に大学に所有権を移転する方式。維持管理・運営は大学が行う。	大学	民間	大学	大学
設計・施工・運営一括発注方式 (DBO方式)		大学が資金を調達し、施設を建設、施設完成直後に大学に所有権を移転し、一定期間民間事業者が維持管理及び運営を行う方式。	大学	民間	大学	民間
民設民営方式		寄宿舎を有する民間に、大学が業務を委託してサービスを提供する方式。	民間	民間	民間	民間
指定管理者方式		施設の維持管理・運営等を、民間事業者を指定して実施させる手法	大学	大学 ※既存施設対象	大学	民間
PFI方式	BOT	民間事業者が資金を調達し、施設を建設、一定期間維持管理及び運営し、事業終了後に大学に施設所有権を移転する方式。	民間	民間	民間 ↓ 大学	民間
	BTO	民間事業者が資金を調達し、施設を建設、施設完成直後に大学に所有権を移転し、一定期間民間事業者が維持管理及び運営を行う方式。	民間 or 大学	民間	大学	民間
	RO	民間事業者が資金を調達し、施設を改修、一定期間民間事業者が維持管理及び運営を行う方式。	民間	※改修 民間	大学	民間
	BOO	民間事業者が資金を調達し、施設を建設、一定期間維持管理及び運営をするが、大学への所有権移転は行わない方式。(事業終了時点で民間事業者が施設を解体・撤去する等)	民間	民間	民間	民間
	コンセッション	既存施設または別の手法により新設した施設の運営権を設定し、民間事業者に権利を譲渡することで、民間事業者が所有以外のすべての権限とリスクを管理し運営する方式。 なお、運営権設定は収入が生じる施設を対象とすることが基本となる。	民間 ※運営に関する部分	無し	大学	民間
	BT+コンセッション	必要施設について民間事業者が資金を調達し、施設を建設、施設完成直後に大学に所有権を移転する。新設した施設に対して運営権を設定し、民間事業者に権利を譲渡することで、民間事業者が所有以外のすべての権限とリスクを管理し運営する方式。 BTO方式と異なり、維持管理運営期間中に民間事業者は施設への設備・改修等投資が可能となるなど、民間のノウハウを活かし裁量を持った施設運営を行う。 収入が生じる施設部分のみを運営権設定対象とし、収入が生じない施設は通常通り BTO方式とすることも可能。	民間	民間	大学	民間

図4：民間のノウハウを活用する事業方式と仕組み

7-3 大学資産（土地・建物）の有効活用による整備促進について

■ 国立大学法人は一定の条件を満たしたうえで、その保有資産の有効活用（土地や建物の民間企業等への貸与）が可能である。

■ この制度を活用して整備促進が可能な下記用途施設については、実施可能性を慎重に検討の上、導入を図る。

- ・ 学内駐車場の PPP/PFI 手法による整備（立体駐車場や入退ゲート装置の整備及び管理運営を民間事業者へ委託するコンセッション手法、定期借地権設定による民設民営方式）
- ・ 施設使用料や、民間ノウハウによる誘致・誘客等が期待できる共同研究施設・学生寮・職員宿舎
- ・ 学内外からの利用が期待できる大学ミュージアム・グッズショップ・食堂等の福利施設

■ また、大学資産の有効活用の導入には法人法による条件のほか、様々な規制（都市計画法・建築基準法・消防法・自治体条例など）との整合も踏まえて推進する。

■ 策定されたキャンパスマスタープランが適切かつ円滑に整備促進されるために、学内横断的な体制と産業界・自治体等様々な関係者との連絡体制を構築するなど積極的に推進する。

電気通信大学キャンパスマスタープラン 2022

(資料編)

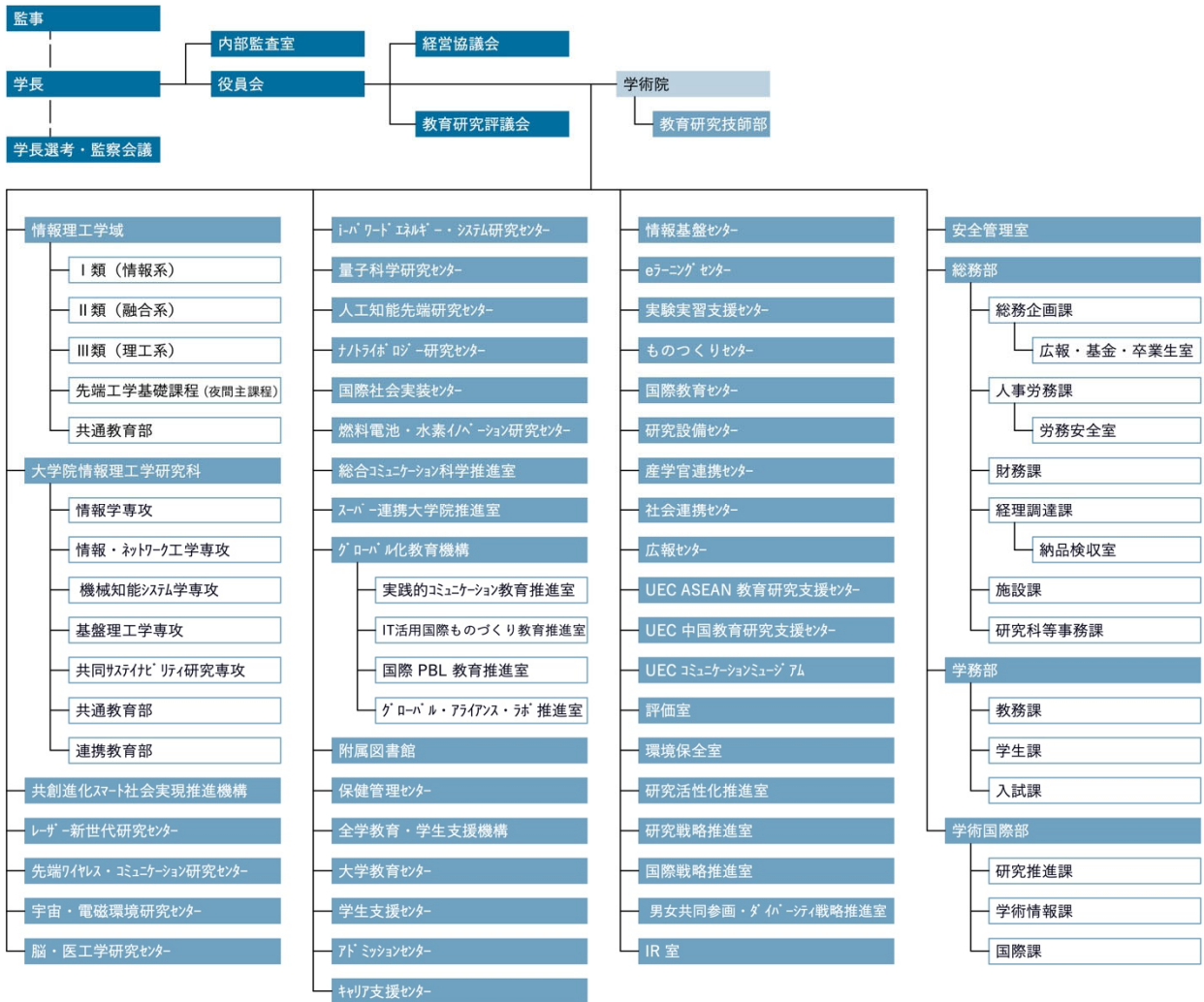
1. 大学概要
2. 現況情報
3. 大学理念、UEC ビジョン ～beyond 2020～
4. 「UEC 共創進化スマート大学キャンパスマスタープラン」アンケート
5. D.C.&I 戦略推進会議 K9 キャンパスマスタープラン検討チーム会議及びWG の記録

参照資料

- ・カーボンニュートラル推進計画
- ・環境報告書 2022

1. 大学概要データ

■ 組織図



■ 学部・大学院

(2022年5月現在)

情報理工学域	大学院情報理工学研究科	
	博士課程 前期課程・後期課程	博士課程 後期課程
I類【情報系】	情報学専攻	共同サステイナビリティ研究専攻
II類【融合系】	情報・ネットワーク工学専攻	
III類【理工系】	機械知能システム学専攻	
先端工学基礎課程【夜間主課程】	基盤理工学専攻	

■ 学生数

(2022年5月1日現在)

区分			学生数		
			男子	女子	計
学域	情報理工学域	未配属	326	39	365
		I類 (情報系) (総合情報学科、情報・通信工学科を含む)	843	105	948
		II類 (融合系) (知能機械工学科を含む)	850	139	989
		III類 (理工系) (先端理工学科を含む)	850	93	943
		先端工学基礎課程 (社会人コース、インターンシップコースを含む)	139	29	168
大学院	大学院情報理工学研究科 (大学院情報システム学研究科を含む)	1,238	168	1,406	
大学総合計		4,246	573	4,819	

2. 現況情報

■ 現況配置図



■建物リスト-1

棟名称	建築面積	延床面積	建築年	構造	階数		大規模改修		耐震区分
					地上	地下	全面改修	部分改修	
本館	1,056	3,973	1971	R	5	1	2012		旧耐震
				R	2	0			
東32号館	280	251	1972	R	1	0			旧耐震
東31号館	258	511	1980	R	2	0		2012	旧耐震
東37号館	402	526	1972	R	2	0	2022	2012	旧耐震
東36号館	304	304	1979	R	1	0	2022		旧耐震
油庫	14	14	1995	B	1	0			新耐震
物品庫	169	314	1979	S	2	0			旧耐震
正門守衛所	40	40	1973	R	1	0		2001	旧耐震
講堂	1,397	2,282	1981	RS	3	1			旧耐震
課外活動共用施設	608	1,783	1982	R	3	0			新耐震
本部倉庫	125	242	1985	R	2	0			新耐震
東34号館	862	856	1969	R	1	0	2022	2001	旧耐震
			1989	R	1	0			新耐震
			1990	S	1	0			新耐震
東33号館	283	461	1978	R	2	0	2022	2001	旧耐震
			2001	S	1	0			新耐震
			2008	S	1	0			新耐震
東9号館	692	2,314	1962	R	4	0	2003		旧耐震
			2003	S	4	0			新耐震
職員研修所	68	136	1979	R	2	0			旧耐震
東3号館	2,951	14,908	1965	R	2	0	2001		旧耐震
			1971	R	3	0			旧耐震
			1979	R	3	1			旧耐震
			2001	R	2	0			新耐震
			2002	SR	10	1			新耐震
			2002	R	4	0			新耐震
東35号館	768	1,200	1965	R	2	0		2015	旧耐震
			2001	S	1	0		新耐震	
東10号館	517	1,972	1966	R	4	0	2008		旧耐震
C棟	320	1,121	1966	R	4	0		2012	旧耐震
新C棟	346	1,261	2012	R	4	0			新耐震
D棟	599	2,307	1967	R	4	1	2010		旧耐震
			2010	S	1	0			新耐震
A棟	684	1,855	1967	R	4	0	2007		旧耐震
			2007	R	4	0			新耐震
B棟	1,340	2,295	1968	RS	2	0	2010		旧耐震
職員休憩室	186	186	1968	R	1	0		2012	旧耐震
学内保育施設	106	103	1968	W	1	0		2012	旧耐震
東2号館	606	4,021	1969	R	6	1	2009		旧耐震
保健管理センター	335	446	1970	R	1	0			旧耐震
			1983	R	2	0			新耐震

■建物リスト-2

棟名称	建築面積	延床面積	建築年	構造	階数		大規模改修		耐震区分
					地上	地下	全面改修	部分改修	
旧電話交換室	85	83	1970	R	1	0			旧耐震
図書館倉庫	100	148	1971	R	2	0		2001	旧耐震
弓道場	121	121	1988	S	1	0			新耐震
第2体育館	339	642	1984	RS	2	0		2010	新耐震
体育館	2,034	2,530	2015	RS	2	0			新耐震
西2号館	948	8,252	1972	SR	8	1	2014		旧耐震
			1973	SR	8	1			旧耐震
			1991	SR	8	1			新耐震
西1号館	640	3,189	1972	R	5	1	2013		旧耐震
西3 1号館	568	987	1973	R	2	0			旧耐震
西3号館	717	2,701	1974	R	5	0	2013		旧耐震
			1979	R	3	0			
西門守衛所	33	33	1974	R	1	0			旧耐震
西4号館	378	2,253	1975	R	6	1	2010	2022	旧耐震
西5号館	649	4,321	1976	SR	8	1	2003	2022	旧耐震
西食堂	479	470	1979	R	1	0			旧耐震
学生寮	578	2,235	1979	R	5	0		2006	旧耐震
西6号館	412	2,597	1980	SR	7	0	2003		旧耐震
西7号館	798	5,149	1982	SR	7	0	2019		新耐震
			2018	S	1	0			新耐震
西地区受電室	77	77	1982	R	1	0			新耐震
西8号館	1,185	5,543	1987	SR	8	0	2020	2019	新耐震
西9号館	971	6,820	1991	SR	8	0	2023		新耐震
プール管理棟	115	115	1994	R	1	0			新耐震
西10号館	1,388	8,511	1997	SR	8	0			新耐震
西地区受水槽ポンプ室	26	26	1997	B	1	0			新耐震
テニスコート倉庫	15	15	2005	S	1	0			新耐震
車庫	88	88	2000	S	1	0			新耐震
薬品庫	30	30	2000	R	1	0			新耐震
創立80周年記念会館	446	1,072	2000	R	3	0			新耐震
ボンベ庫	17	17	1988	B	1	0			新耐震
清掃倉庫	53	52	1990	S	1	0			新耐震
国際交流会館	544	1,788	1991	R	5	0		2010	新耐震
大学会館	806	3,949	1998	R	4	1			新耐震
東1号館	556	4,187	1993	SR	8	1			新耐震
東4・5号館	2,323	10,115	1995	SR	8	0			新耐震
東6号館	1,542	10,691	2000	SR	9	0		2023	新耐震
東7号館	650	2,172	1996	R	4	0			新耐震
			2003	R	4	0			新耐震
東8号館	375	1,503	1997	R	4	0			新耐震
西11号館	453	1,998	2010	R	5	0			新耐震

3. 大学理念、UEC ビジョン ～beyond 2020～

■理念

人類の持続的発展に貢献する知と技の創造と実践を目指します。

理念1：万人のための先端科学技術の教育研究

情報と通信を核とした諸領域の科学技術分野において、世界をリードする教育・研究拠点として教育力と研究力を発展させます。

1. 我々の生活環境を安心・安全で豊かなものにするための、先端科学技術分野の教育・研究を推進します。
2. 情報、通信、制御、材料、基礎科学、および将来の社会に必要な諸分野の教育・研究を推進します。
3. 理論からものづくりまでの特徴ある研究で、世界をリードする教育・研究拠点を目指します。

理念2：自ら情報発信する国際的研究者・技術者の育成

社会と技術への幅広い見識、国際性、倫理観を備えた、創造力と実践力のある研究者・技術者を育成します。

1. 我が国の科学技術創造立国を弛まぬ教育と研究で支え、世界に貢献する実践力のある人材を育成します。
2. 高い倫理観、コミュニケーション能力、判断力を持つ指導的な研究者・技術者を育成します。
3. 学部教育と大学院教育の連携を推進し、大学院教育の高度化と多様化をより一層図ります。社会人教育を重視し、留学生の受け入れと送り出しを一層充実させます。

理念3：時代を切り拓く科学技術に関する創造活動・社会との連携

広く内外と連携した知と技の創造活動を通じて、我が国と国際社会の発展に貢献します。

1. 国内外の研究者の交流を活性化し、同時に国際化を推進します。
2. 国際的視野に基づき、広く外部の機関との連携を強化し、時代を切り拓く科学技術分野の研究を推進します。
3. 地域産学官民連携を強化します。

■ UEC ビジョン ～beyond 2020～

～私たちが思い描く Society 5.0、すなわち「共創進化スマート社会」の実現に向けて～

我が国がめざすべき未来社会の姿として提唱されている Society 5.0 では、IoT (Internet of Things) により様々な知識や情報を共有し、人工知能(AI)により新たな価値を生み出すことで複雑な課題を解決できる、人を中心とした社会を実現しようとしています。本学は、Society 5.0 を、人間知・機械知・自然知の融合により新たな価値(進化知)を創造し様々な課題を自律的に解決しながら発展し続ける「共創進化機能」を内包した未来社会、すなわち「共創進化スマート社会」と考え、その実現に貢献し、自らも共創進化スマート大学となります。

本学は、独自の科学技術の哲学として「総合コミュニケーション科学」を提唱しています。これは、人・社会・物・自然間の相互作用をコミュニケーションとして捉え、その本質と意義を正しく理解し機能的に向上させることで、社会に存在する様々な境界線を越え、従来異質であると考えられていたもの同士の相互作用により生みだされる多様性を、イノベーションの源泉とする考え方です。この総合コミュニケーション科学を思考の基礎とし、既存の枠組みや専門分野を越え、多元的な多様性(pluralistic Diversity)の中で幅広い連携・協働と深い相互理解(deep Communication)により、継続的にイノベーション(sustainable Innovation)を創出する「D.C.&I. 戦略」を推進します。このD.C.&I. 戦略の不断の実践を通して、あらゆる人々がより一層心豊かに生きがいを持って暮らすことのできる社会、すなわち様々な問題を自律的かつ連続的に解決し進化し続ける機能を内包した共創進化スマート社会を実現します。同時に、本学自らも共創進化機能を持ち、発展し続けます。これらの取り組みを通じ、尊敬される大学、頼れる大学、また自ら誇れる大学として、学生、教職員、卒業生、社会からの期待に応えていきます。

(共創進化スマート社会の実現拠点)

1. 世界的な教育・研究機関として共創進化スマート社会の実現拠点となります

通信・IoT技術、AI技術、サイバーセキュリティ技術、ロボット・計測技術、光・量子技術など、共創進化スマート社会の実現に不可欠な分野における世界水準の教育力と研究力を有する教育研究機関として、グローバルかつ個性豊かな学生・研究者がボーダーレスに集い活躍できる環境を提供します。確かな専門性を軸に据えつつも学際的・多元的な思考力と実践力を備えた、進化し続ける未来社会をデザインし先導できるイノベーター人材を養成するとともに、既成概念にとらわれない全く新しい未来社会の知を創造し続け、共創進化スマート社会の実現を牽引する拠点となります。

(共創的進化の実践)

2. 自らも共創進化スマート大学となります

本学自らを一つの共創進化スマート社会として捉え、その実現のため、研究成果と最先端テクノロジーの実装・実現の場とすることで進化し続ける、共創進化スマート大学となります。本学が持つ世界水準の技術を活用し、あらゆるモノやコトの豊かなコミュニケーションのもとで、知識・知見を集積・共有・再構成することで、新たな価値(進化知)が自律的に創造され続ける進化機能を学内にも実現します。これにより、例えば、時間と空間に縛られない個人に最適化された教育や、リアルタイムで情報と知を共有できるダイナミックな研究環境、および時間の無駄を排しリソースを最大活用できる運営などが自律的に生みだされ続け進化します。

(D. C. & I. 戦略と知の好循環形成)

3. あらゆる活動に対して D. C. & I. 戦略を実践し教育・研究・人材の循環拠点を形成します

進化知創造のための不可欠な基盤として、分野、対象などに関して異なる考え方が共存する多様性（ダイバーシティ）を堅持するとともに、全構成員の自発的、実践的かつ多様な活動を尊重します。さらに、情報ネットワークや人的ネットワークを駆使し、異なるものを含めた要素間の相互理解・相互作用・相互触発（コミュニケーション）を促進することにより、本学のあらゆる活動を活性化させます。これにより、既存の枠組みにとらわれることなく、学内および諸組織や地域、産業界等との相互交流・連携・協働を推進するための教育・研究・人材の好循環を形成します。この好循環から、共創進化スマート社会の構築に寄与する新たな価値を創造（イノベーション）し、SDGs（持続可能な開発目標）の達成にも貢献します。



4. 「UEC 共創進化スマート大学キャンパスマスタープラン」アンケート

■第1回 キャンパスやキャンパス周辺の空間に対する印象や電通大の特徴について

実施方法： Google Forms, 2022年8月5日～8月22日

回答対象： 学生 16人/4,785人 (0.3%)

教員 26人/ 356人 (7.3%)

職員 16人/ 384人 (4.2%)

目黒会 0人/ -人 (-%)

キャンパスの施設を利用する企業 5人/-人 (-%) (57社)

Q1：教育研究活動をおこなう場所 (屋内)] →キャンパス内の問題点や改善点
Q2：屋外スペース

Q3：お気に入りの場所] →キャンパス内の「お気に入りの場所」「危険な場所」
Q4：不便や危険に感じる場所

Q5：記念撮影を撮りたい場所 →キャンパス内の「重要な場所」

Q6：キャンパス外のお気に入りの場所 →キャンパス外、周辺地域の居場所

Q7：電気通信大の魅力、これから →UEC関係者が思う「電通大」

(A) 「電通大」の特徴 (Q1-7より抜粋)

(B) 「調布キャンパス：この地域に長年存在するキャンパス」という地域特性 (Q1-7より抜粋)

(1) 教育研究活動を行う場所について

清掃状況等

- ・臭いが気になる (東3号館/地下階/西8無響室/サークル棟)
- ・清掃が行き届いていない (東3号館/リフレッシュスペース等)

- ・清潔が良い
- ・エアコン清掃が自力
- ・窓の外側清掃が該当教員の予算
- ・清潔感はあるが、外装は地味

トイレ

- ・汚い(清掃面・ゴキブリ)
- ・女子トイレが少ない
- ・便器が少ない(西8号館2F以上)
- ・男女で別の階にある
- ・女性用の管理が行き届いていない
- ・頻繁に故障する

設備

- ・断熱性能が低い
- ・EVの老朽化
- ・EVがなく使えない人も(東3号館)
- ・換気扇から異音
- ・老朽化でエアコンが故障しやすい
- ・虫が入ってくる(蚊・ゴキブリ)
- ・EVが狭い(西9号館)

空調設備・修繕

- ・各教室で空調管理できたら良い
- ・改修された棟は空調の効きが良い
- ・換気システムが良くない
- ・修繕は進んでいるが管理が不適切
- ・空調を各教室で管理できるように
- ・空調設備が十分

職員の業務スペース

- ・執務室からの眺めが良い
- ・小部屋がグループ学習/コロナ対応に○
- ・スペースにゆとりがあり落ち着く
- ・作業スペースが確保されている

教室

- ・雑然としている
- ・内線電話が無い
- ・広さは十分
- ・机の奥行きがない
- ・机と椅子は分離してほしい
- ・教室内にゴミ箱を設置してほしい

食事スペース

- ・場所、お店ともに少ない
- ・食堂の改革が必要(ゆっくりできる)
- ・雨天時や持参した際の場所がない
- ・食堂を拡大してほしい

その他スペース

- ・学生交流ができる施設がほしい
- ・学生のための部屋を広くしたい
- ・個人スペースが確保されており研究環境としては良い
- ・ミニキッチンを増やしてほしい
- ・会議スペースを増やしてほしい
- ・自習空間を増やしてほしい

スペースの広さ

- ・全体的に狭い
- ・実験室を身近に割当ててほしい
- ・実験室が狭い

消費電力

- ・節電効果を評価するためにフロアごとに消費電力を測定したい
- ・節電啓発が過剰
- ・冷房時特に使用制限が厳しい
- ・電力使用停止を廃止してほしい (トレセンは無料で非常に便利)

UEC CMPアンケート 2022.8 / CTP

配置

- ・各種相談室等がバラバラ
- ・キャリア支援センター職員の配置がバラバラ
- ・総務企画課執務室が複数階に

廊下・玄関の暗さ

- ・照明が暗い為、LED等が好ましい
- ・廊下の蛍光灯の間引場所が不適切
- ・暗く入口の階段が見えない
- ・廊下が平日日中でも暗く怖い

特定意見

- ・ものづくりセンターの設備が充実
- ・保険管理センターの老朽化
- ・五思寮・国際交流会館の老朽化 →害虫発生
- ・西2号館のラーニングスペース
- ・西10号館一階のスペースが良い

Wi-Fi

- ・繋がりにくく、不安定
- ・通信範囲を広げてほしい
- ・UECアカウントの経由が面倒
- ・ゲスト用Wi-Fiが欲しい

その他

- ・各部屋の施錠・解錠をIC化したい
- ・設計/デザイン/サービスが古い
- ・施設がムスリム学生に非対応
- ・図書館のユニークな取組がよい
- ・生協等の利用時間に自由度を
- ・空き教室情報が知りたい

アライアンスセンター

- ・大学との連携が薄い
- ・交流の場がない
- 各階廊下は自由に行き来したい
- ・コンビニ/会議室が便利

凡例 教員 職員 学生 企業

(2) 屋外スペースについて

雑草・緑地空間・パブリックスペース

- ・雑草が多く手入れが行き届いていない
- ・緑が多い (甲州街道沿いの小道等)
- ・空き地をもっと有効活用すべき (厚生棟前/南門周辺/講堂裏/東35号館前/東地区北側/西2・4周辺)
- ・緑地が多いが活用できていない/整備不足
- ・雑草が生い茂るので芝生化したほうが良い
- ・冬は枯葉が多い
- ・コンクリートジャングル/外国の大学みたいな芝生はどうか
- ・猫・亀・蛇など大きな生物も生息している

植栽

- ・古く、虫害や腐食した木が多く手入れ不足 (弓道場付近、東3号館前、駅からの通り等)
- ・正門正面の植栽は手入れが行き届いている
- ・歩道に木が覆いかぶさっている
- ・イチョウなどによって清掃が行き届かず汚い
- ・伐採した後に植樹されていないので植林すべき
- ・計画的な植栽が行われていない
- ・新C棟前の芝生にバラが植わってしまった
- ・学生有志の剪定大会を行い交流を生み出したい
- ・生協前のピンクの木が綺麗で残してほしい

設備

- ・水はげが悪い(西地区/南門正門付近)
- ・ゴミ箱が多い/古く見た目悪い/溢れている
- ・プレハブ物置多く必要なら整備すべき
- ・テニスコートがあまり使用されていない
- ・80年記念会館のガラス・階段などが埃っぽく清潔感ほしい
- ・大物の廃棄スペースが西地区にもほしい
- ・排水溝がつまる(東35号館脇/A棟東1号館間)

自動車について

- ・校内の制限速度を超える車がいる
- ・西地区の駐車場整備が必要
- ・内部への入構/駐車を制限すべき

サイン

- ・サインに統一感がある
- ・サイン/掲示板を整理すべき
- ・歩行者/自転車優先の表示が多い

舗装

- ・地面の凹凸が激しく車いす/台車の移動が危険 (ツギハギ(西)、煉瓦(東))
- ・大学会館前広場の段差が危ない
- ・丘の小道が狭く暗いため整備必要

出入口

- ・出入りが便利(武蔵境通りと甲州街道の角の通用門/神社への出入口)
- ・出入りが不便(調布駅から西地区(西10号館南東側に出入口ほしい/西地区甲州街道沿いの東より/東キャンパスの北/西キャンパスの南))
- ・東キャンパス北門の利用可能時間を延ばしてほしい

景観

- ・ブロック塀なくなってよかった
- ・南門付近の景観を改善すべき
- ・キャンパスが雑然としている
- ・広い敷地が外からわかりにくい
- ・式などの際に噴水が綺麗

コミュニティ

- ・講義室前談話スペースを広くすべき
- ・コミュニケーションパークのテーブル/ベンチでコミュニティ創出してる

自転車について

- ・廃棄自転車が放置されている
- ・強風で自転車が倒れている(東1,5館)
- ・自転車置き場が少ない/外側に整備
- ・学内放置を認めないほうが美化/災害時の安全維持により?

歩きやすさ

- ・道が広く歩きやすい
- ・迷わず棟間を移動できる

歩きにくさ

- ・道が狭い(中門付近/都道/南門正門間)
- ・夜道が暗い
- ・車道/歩道の境が曖昧(色分けすべき)
- ・道が汚い(A棟一本館・保健センター)
- ・南門からの道の足元が悪い
- ・中門の信号機が押しボタン式であることを目立たせてほしい

喫煙所の整備

- ・喫煙所増やしてほしい(特に東地区)
- ・小川地区で学外者の喫煙が多い
- ・甲州街道沿い喫煙所の臭いが強い

らしさ

- ・東西キャンパス/建物に特徴がない
- ・門の大学看板がお墓みたい
- ・大型液晶を生協前広場に設置したい
- ・校内全域でUEC Wirelessを繋ぎたい
- ・建物壁面にある大学名が見やすい

その他

- ・地域に開かれた大学になってほしい
- ・喫茶・自販機が欲しい

凡例 教員 職員 学生 企業

(3) 調布キャンパス内のお気に入りの場所

自然・植物

- ・大きい木、サルズベリは残すべき
- ・桜の木は残してほしい
- ・100周年キャンパスの芝生

プライベートスペース

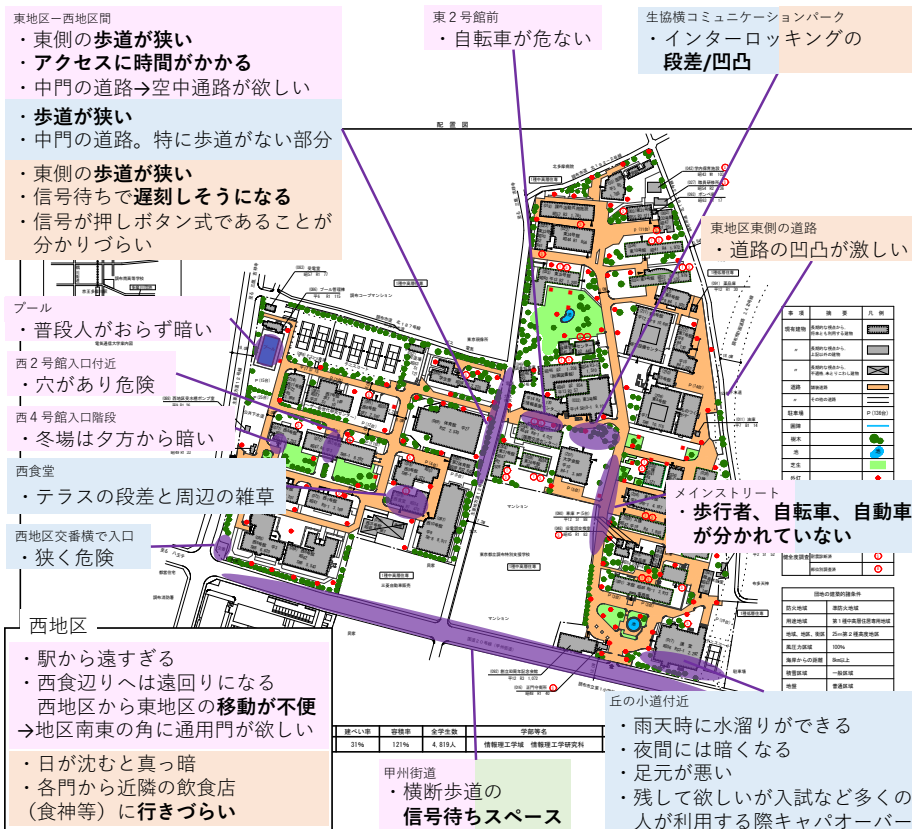
- ・部室：仲間との居場所
- ・サークル棟：交流の拠点
- ・喫煙場所が落ち着く
- ・自分の研究室
- ・東34号館の事務所
- ・旧W9.135は広くて学生とも交流できた

その他の意見

- ・東西地区間の格差があり、西地区にはお気に入りの場所がない

凡例 教員 職員 学生 企業

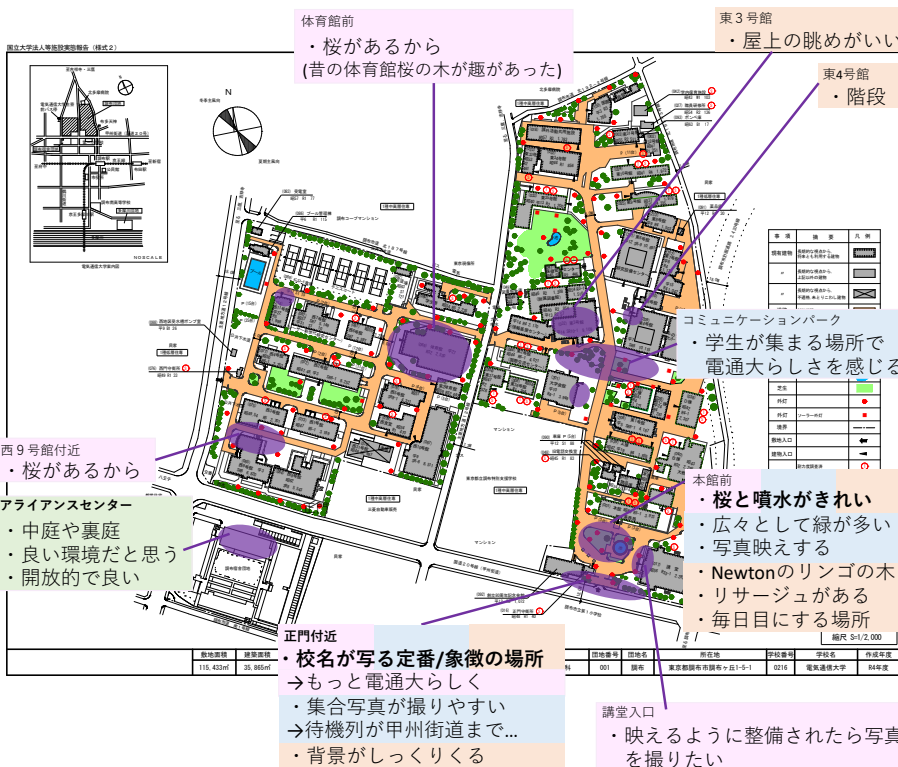
(4) 不便や危険に感じる場所等



- トイレ**
 - ・男性用と女性用が階で別れている
 - ・トイレの数が少ない
- 喫煙所**
 - ・位置が分かりづらい
 - ・学生が多い場所に増設すべき
- 緑・生物の管理等**
 - ・ハチやカラスが怖い
 - 蛇なども見かけた
 - ⇒緑を残すことは大事だが...
 - ・今にも折れかかっている木がある
- スペース不足**
 - ・駐輪場の不足(廃棄自転車で圧迫)
 - ・食堂の混雑
 - ・昼休みの食堂の階段の混雑
 - ・講堂に全員入れない
 - ・サークル棟を増設して欲しい
- 歩行者の安全**
 - ・夜は道が暗い
 - ・歩行者動線がないところがある
 - ・夜道は足元が悪い
- その他**
 - ・本館が西キャンパスから遠い
 - ・授業の合間に利用できる場所が少ない (学生との会話より)
 - ・多摩川グラウンドが遠い
 - ・食堂が遠い
 - ・雨天時に利用できる場所が少ない

凡例 教員 職員 学生 企業

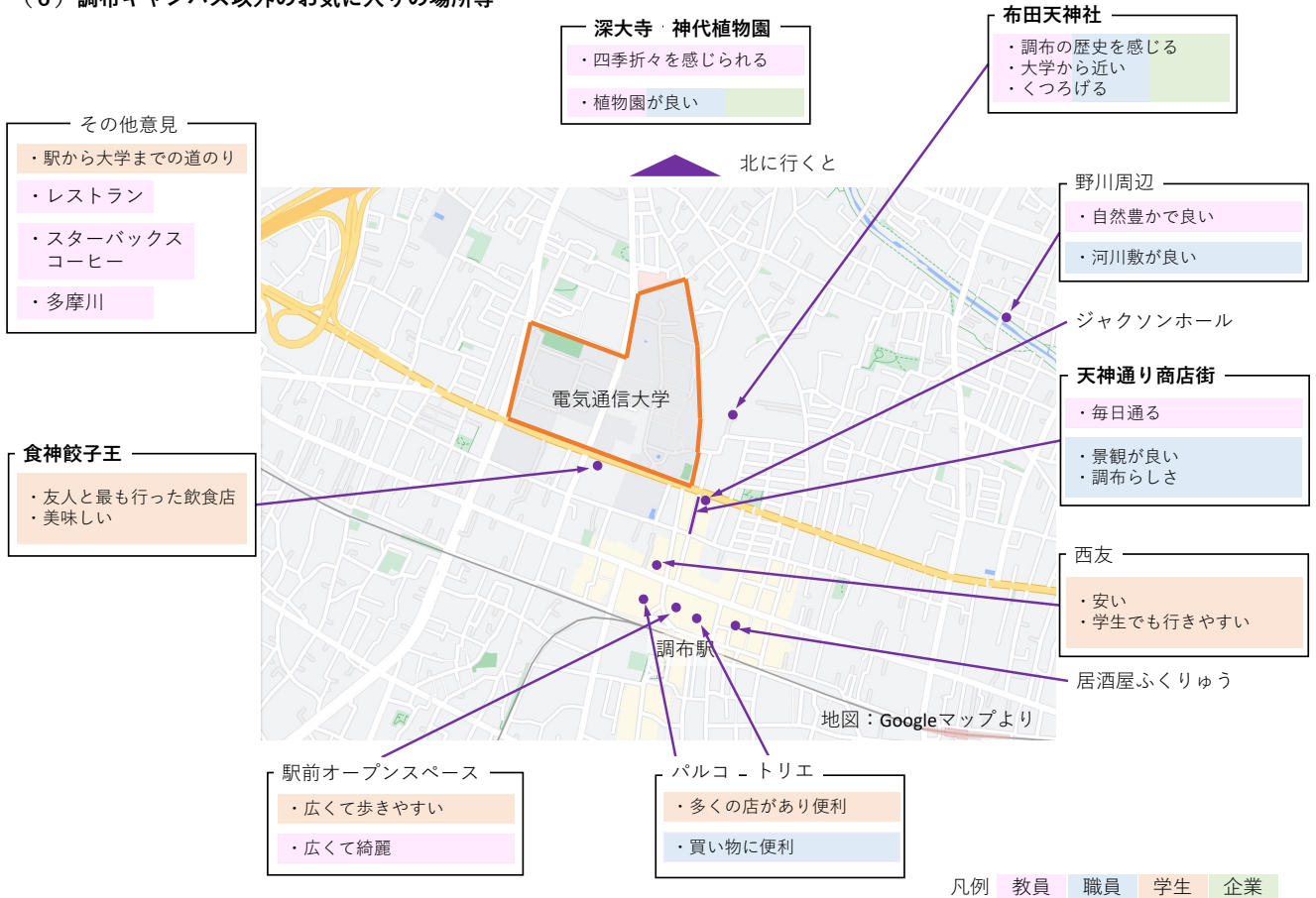
(5) 記念写真を撮りたい場所



- 研究室**
 - ・自分が研究生生活を送った建物の前
 - ・研究室で過ごすことが多いため
- その他の意見**
 - ・アイデンティティになる映える建物が必要だと思う
 - ・富士山が見える屋上
 - ・東地区の奥と西地区は寂れている
 - ・シンボリックな場所は無いと思う
 - ・シンボルがある場所
 - ・十分な広さがある場所
 - ・自転車がなく綺麗な場所
 - ・建物が綺麗な場所
 - ・桜が咲いている場所

凡例 教員 職員 学生 企業

(6) 調布キャンパス以外のお気に入りの場所等



(7) 電通大の魅力とこれからの大学キャンパスについて

交通利便が良い
・アクセスが良い
駅(都心)/空港から近い車で来やすい
→一方で国際性に欠ける

コンパクトなキャンパス
・単一キャンパス
・小規模なキャンパス
→街へ溶け込みやすい
→機能が集約されている
→構内を巡りやすい

体制・制度の充実
・個性の打ち出しやすさ
・高い就職力
・学費の安さ
・社会実装のハブ機能
・積極的な社会人受け入れ
・調布市との強いつながり
・体育がある
・2年次に配属の類を選択できる
・積極的な共同開発支援/アイデア
コンテンツの開催

環境の良さ
・緑が多い
・アットホームさ
・フットワークの軽さ
・自分たちで作り上げられる環境
・研究環境の充実
・公共施設/商業施設/飲食店が近い
・図書館 (Agora) の存在
・静かで環境が良い
・駅周辺の店舗が充実

理系らしい良さ
・レベルの高い理系単科大学
・理工系の授業科目がそろっている
・電気通信への特化

授業・研究について
・充実した学習支援
・研究力/教育力が高い
・最新鋭の研究
・ハイレベルな授業を夜間に開講
・異色の研究

学生の特色等
・同志が多い
・変な人は多いが根は真面目
・オタクが多く多様性を認める気風
・自分らしく生きて輝ける
・スマートなものへの好奇心が強い
・プログラミングに強い人が多い
・順応性が高い
・まじめで頼りになる
・学科への特化/個人的な特殊技能
・数学/情報科学系/コンピューター
に強い

これから活かしたい"らしさ"
・工学系単科大学の特色
・各学生/職員/教員の特色や魅力

街にとってのキャンパス
・地域住民等の利活用
→親しみやすさの創出
→中高生や一般向けのイベント開催
→一般開放の周知(図書館等)
→産学連携の強化

空間
・オープンな交流できる研究空間
・広い空間
・喫茶など
・自由に集え、食事できる開けた空間
・アクティブラーニングスペース
・各棟内に明るい自習の場
・分野の統合/最適化のための交流空間
・地域住民、海外の方等との交流空間
・夜遅くまで滞在できる空間
・雨天時にご飯を食べる場所(食堂以外)

通信
・安定したWi-Fi環境
・セキュアなゲスト向けWi-Fi
(オープンキャンパス/産学連携時)
・ネットワークに自由にアクセスできる
場所の提供

制度・システム等
・最先端のデジタルサービスの導入
・古い建物と新しい技術の融合
・学生支援職員の連携強化
・大学を目指す生徒が自由に参加する
企画
・学生同士/教授陣との交流の促進
・知的好奇心を満たす活動の促進
・講義使用される部屋を確認する制度
・大学の宣伝機能の強化
・ICチップを用いた生徒証での施設管理
・プログラミングの充実 (特に言語)

その他
・調布駅前広場に電通大の大型液晶
・ICチップを用いた生徒証での施設管理
・教室間での移動時間の短縮

(A) 「電通大」の特徴 (Q1-7より抜粋)

研究/学習環境の高さ → 研究環境への要望 → 夜間のキャンパス環境

研究/学習環境の高さ

研究や学習に誇りを持っており学生の意欲の高さが伺える。

研究/学習に対する誇り

- 授業・研究について
 - 充実した学習支援
 - 研究力/教育力が高い
 - 最新鋭の研究
 - ハイレベルな授業を夜間に開講
 - 異色の研究
- 学生の特徴等
 - 同志が多い
 - 変な人は多いが根は真面目
 - オタクが多く多様性を認める気風
 - 自分らしく生きて輝ける
 - スマートなものへの好奇心が強い
 - プログラミングに強い人が多い
 - 順応性が高い
 - まじめで頼りになる
 - 学科への特化/個人的な特殊技能
 - 数学/情報科学系/コンピューターに強い
- 理系らしい良さ
 - レベルの高い理系単科大学
 - 理工系の授業科目がそろっている
 - 電気通信への特化
- 環境の良さ
 - アットホームさ
 - フットワークの軽さ
 - 自分たちで作り上げられる環境
 - 研究環境の充実

研究環境への要望

多くの時間を過ごしている実験、研究室等の快適性や利便性への意見/要望が多い

実験/研究施設への愛着

落ち着く場所

- 自分の研究室
- 課題や食事の場所

記念写真を撮りたい場所

- 自分が研究生活を送った建物の前
- 研究室で過ごすことが多いため

分野間交流の要望

- 学生交流ができる施設がほしい
- 交流の場がない → 各階廊下は自由に行き来したい
- 学生同士/教授陣との交流の促進
- 知的好奇心を満たす活動の促進

実験/研究施設への意見

スペースの広さ

- 全体的に狭い
- 実験室を身近に割当ててほしい
- 実験室が狭い

清掃と設備

- 修繕は進んでいるが管理が不適切
- 空調を各教室で管理できるように
- 臭いが気になる
- 清掃が行き届いていない

夜間のキャンパス環境

夜間の講義や実験等での活動で、夜間にもキャンパス内で活動がみられる。故に夜間への要望が多くみられる。

夜間のキャンパス環境への要望

- 夜道が暗い
- 夜道は足元が悪い
- 日が沈むと真っ暗（西地区）
- 夜遅くまで滞在できる空間
- 西4号館入口階段
- 冬場は夕方から暗い

リフレッシュできる空間

くつろぎや憩いの場を求めている（室内での研究/活動の多さの為...?）

くつろげるからお気に入りの場所

西10号館1階フリースペース	大会館
くつろぎやすく好き	憩いの場所
西食堂	広い空間や喫茶が欲しい
・コーヒーでくつろぐ	布田天神社
保健センター裏の緑地	・くつろげる
・居心地が良い	
・緑地を維持してほしい	
・喫煙場所が落ち着く	
・喫煙所増やしてほしい(特に東地区)	
東3号館	
・屋上の眺めがいい	

凡例 教員 職員 学生 企業

(B) 「調布キャンパス：この地域に長年存在するキャンパス」という地域特性 (Q1-7より抜粋)

キャンパス構造について

キャンパスが雑然とし全体感が分かりにくく、規模感が小さいことが特徴。

キャンパス外からの分かりずらさ

東西キャンパスの雑然さ

- 東西キャンパス/建物に特徴がない
- ブロック塀なくなってよかった
- キャンパスが雑然としている
- 広い敷地が外からわかりにくい

出入りの便利さ/不便さ

- 出入りが便利(武蔵境通りと甲州街道の角の通用門/神社への出入口)
- 出入りが不便(調布駅から西地区(西10号館南東側に出入口ほしい/西地区甲州街道沿いの東より/東キャンパスの北/西キャンパスの南))
- 駅から遠すぎる
- 西地区から東地区の移動が不便
- 日が沈むと真っ暗
- 各門から近隣の飲食店(食神等)に行きづらい

コンパクトなキャンパス

- 単一キャンパス
- 小規模なキャンパス
- 街へ溶け込みやすい
- 機能が集約されている
- 構内を巡りやすい

立地・地域との関わりについて

キャンパスと駅・商店街が近く、長年かけて学生と地域が信頼構築している。

調布というアクセス性のある立地

- アクセスが良い
- 駅(都心)/空港から近い車で来やすい
- 一方で国際性に欠ける

キャンパスと駅・商店街の距離感

- 駅周辺の店舗が充実
- 公共施設/商業施設/飲食店が近い

駅前オープンスペース

- 広くて歩きやすい
- 広くて綺麗

天神通り商店街

- 毎日通る
- 景観が良い
- 調布らしさ

市・企業とのつながり

- 企業へアンケート→関係性良好では？
- 調布市との強いつながり

緑地について

緑地が多い調布に長年立地することでキャンパス内に緑が浸食している。

調布の緑地・川

深大寺・神代植物園

- 四季折々を感じられる
- 植物園が良い

野川周辺

- 自然豊かで良い
- 河川敷が良い

キャンパス内に入り込む緑

- 大きい木、サルスベリは残すべき
- 桜の木は残してほしい
- 100周年キャンパスの芝生
- 緑が多い(甲州街道沿いの小道等)
- 緑地が多いが活用できていない
- 雑草が生い茂るので芝生化すべき
- 冬は枯葉が多い
- 猫・亀・蛇など大きな生物も生息

凡例 教員 職員 学生 企業

■第2回 キャンパスマスタープラン案と構内交通について

実施方法： Google Forms, 2022年12月20日～2023年1月10日
 回答対象： 学生 23人/4,785人（0.5%）
 教員 17人/ 356人（4.8%）
 職員 12人/ 384人（3.1%）
 目黒会 0人/ -人（-%）
 キャンパスの施設を利用する企業 9人/-人（-%）（57社）

1.交通手段

		徒歩	自転車	自動車	電車	バス	その他
全体		9	13	6	30	2	1
内 訳	学生	3	5	0	15	0	0
	教員	4	3	2	7	1	0
	職員	1	4	2	4	1	0
	関連企業	1	1	2	4	0	1

2.リアルな交流の場としてのキャンパスについて

- (1) リアルな交流の場としてのキャンパス（令和4年12月19日開催 第5回キャンパスマスタープラン検討チーム会議 資料5 P3、以下同じ）をご覧ください、どのように思われたかをお聞かせください。

		良い	どちらでも良い	良くない
全体		32	21	8
内 訳	学生	9	12	2
	教員	7	6	4
	職員	7	3	2
	関連企業	9	0	0

- (2) 良くないと思われた理由・意見まとめ

- ・ 専門用語（カタカナ語等）が多く理解しづらい。（学生4人、教員2人）
- ・ 概念的な内容なため、具体性に欠ける。（教員4人、職員1人）
- ・ 社会的な意義はあると思うが、学内外からの需要や効果はよく理解できなかった。（学生1人）
- ・ 講義室の利便性の低下が懸念される。（学生1人）
- ・ 地上1階という他階層では実現できない可能性を持つ空間であるため、「地上レベルの制約を極力なくす」ことを盲目に進めることは理解しがたい。（学生1人）
- ・ キャンパス内の安全性に不安がある。（学生1人）
- ・ 電通大の特徴は情報・ものづくり・理工が融合していることであるにも関わらず、恩恵を受けるのが電通大の”得意分野”とされるAIなど情報系に限定されている。（教員1人）

3.フレームワークプランについて

- (1) フレームワークプラン（資料P13-14）をご覧ください、どのように思われたかをお聞かせください。

		良い	どちらでも良い	良くない
全体		37	19	5
内 訳	学生	13	7	3
	教員	8	7	2
	職員	7	5	0
	関連企業	9	0	0

- (2) 良くないと思われた理由・意見まとめ

- ・ 東地区と西地区の移動のしづらさが解消されていないように見える。（学生4人）
- ・ センターゾーンに学外者が増加することは、学生の移動においてボトルネックとなるような印象を受ける。（学生1人）
- ・ リアルな交流の場としてのキャンパスとの繋がりが不明瞭。（教員1人）

- ・ 西 10 号館裏に通用口が欲しい。(学生 1 人)
- ・ 丘の小道とフェンスを撤去し、甲州街道沿いの歩道としてはどうか。(学生 1 人)
- ・ メインストリートを A 棟と B 棟の間の道としてはどうか。(学生 1 人)
- ・ 東西地区の間にあるマンションや三菱自動車、東京現像所の土地を買収し、多摩川運動場の機能を移転できないか。(学生 1 人)
- ・ 西地区テニスコートを縮小してほしい。(教員 1 人)
- ・ 建物を新しくするだけでなく、その後維持することも考慮してほしい。(教員 1 人)
- ・ 調布市では 2 年前に外環道の工事で住宅地が陥没した事故があったため、大規模な工事を行う場合は、地域住民に対して十分な説明が必要だと思う。(職員 1 人)

4.構内の交通に関する危険度について

(1) 構内の交通に関する危険度についてお答えください。(複数回答可)

		危険だと思ったことはない。	歩行者同士でぶつかったことがある。	自転車と接触したことがある。
全体		44	5	5
内 訳	学生	14	4	5
	教員	10	1	0
	職員	11	0	0
	関連企業	9	0	0

(2) 構内の交通に関する危険度に関する意見まとめ

- ・ 中門が危険である。(学生 1 人、職員 1 人)
- ・ 自転車や自動車との接触未遂を経験し、危険に感じている。(学生 3 人、教員 3 人、職員 1 人)
- ・ 制限速度を超過した自動車が見受けられる。(学生 1 人)
- ・ 歩車分離が必要と思われる。(教員 1 人)
- ・ 地面の凹凸を改善してほしい。(職員 1 人)

5.自転車の利用状況について

(1) 多摩川グラウンドまで自転車を利用していますか。

		利用している。	利用していない。
全体		10	51
内 訳	学生	6	17
	教員	1	16
	職員	2	10
	関連企業	1	8

(2) キャンパス内で自転車を利用していますか。

		利用している。	利用していない。
全体		14	47
内 訳	学生	6	17
	教員	2	15
	職員	3	9
	関連企業	3	6

(3) キャンパス内で自転車を利用している理由まとめ

- ・ 移動時間短縮のため。(学生 5 人、教員 1 人、職員 2 人、関連企業 2 人)
- ・ 通学で使用しているため。(学生 1 人)

(4) シェアサイクル(共用自転車)についてご利用できる環境があったら利用しますか？

		利用する。	利用しない。
全体		29	32
内 訳	学生	15	8
	教員	3	14
	職員	7	5
	関連企業	4	5

6.キャンパス内の駐車場について

- (1) キャンパス内の駐車場についてどのような方針が良いと思いますか？

		現在のままで良い	駐車場は出入り門付近にまとめて配置し、キャンパス中心部には車を入れない方が良い。	サービス用・来客用の駐車場だけとして、通勤・通学には車を使わない方が良い。
	全体	32	22	3
内 訳	学生	9	10	2
	教員	10	5	1
	職員	7	4	0
	関連企業	6	3	0

- (2) キャンパス内の駐車場に関する意見まとめ

- ・ 駐車場を拡充するべきだと思う。（学生 2 人）
駐車場は出入り門付近にまとめて配置し、キャンパス中心部には車を入れない方が良いとは思いますが、雨天時や地面の凹凸等により台車で移動が困難な場合もあるため、建物付近まで自動車が進入できるような特例も欲しい。（教員 1 人）

- (3) キャンパス内の自動車・自動二輪車の駐車有料化についてどう思いますか。

		賛成	反対
	全体	21	40
内 訳	学生	4	19
	教員	6	11
	職員	6	6
	関連企業	5	4

7.「共創進化型イノベーション・commons マスタープラン（案）」をご覧になった感想やご意見がございましたらご記入ください。

- (1) 「共創進化型イノベーション・commons マスタープラン（案）」に対する感想・意見まとめ

- ・ キャンパス全体に活気が出るようにしてほしい。（学生 1 人）
- ・ GATEWAY EAST には賛成だが、電通大の玄関口である南門はいち早く改修すべき。（学生 1 人）
- ・ 根幹である「リアルとバーチャルの融合」の概要がまだ定まっていないことに不安を感じている。（学生 1 人）
- ・ 「共創進化型」というわりに、情報系の観点に立った、情報系のためのプランになってしまっている。広い視野を持ち、深く”学問”できる場を作ってほしい。（教員 1 人）
- ・ 電通大はかなり特殊な環境であるため、視野の狭さを感じる。イノベーションのためには、もっと多様な人々と触れるべきで、理工系以外の大学等との交流などの活発化が必要だと思う。（関連企業 1 人）
- ・ バリアフリー化にも力を入れてほしい。（学生 1 人）
- ・ 自転車のルールは今のままの方が良い。（学生 1 人、職員 1 人）
- ・ 現実的な提案とは思えない。（学生 1 人）
- ・ 西 10 号館裏に通用口が欲しい。（学生 3 人）
- ・ ゾーニングの案は大いに賛成する。（学生 1 人）
- ・ 東 3 号館を改修する場合は、高さや設備の維持を強く希望する。（学生 1 人）
- ・ プールは残してほしい。（学生 1 人）
- ・ 中門が危険である。（学生 2 人）
- ・ 旧電話交換室は立地が良くもったいないため、有効活用してほしい。（学生 1 人）
- ・ 学生の交流の場が少ないため、そういった場を設けるための意見交換を行いたい。（学生 1 人）
- ・ 学生・教職員・地域住民との交流、学内行事、緊急災害時の活用など期待できるため、バーベキュー場がほしい。（教員 1 人）
- ・ 今後とも自動車通勤を行いたいので、必要な対価は支払ってもよいと考えている。（教員 1 人）
- ・ 学食や休憩スペースは今より広くなり、混みにくく過ごしやすいスペースになるとよい。（職員 1 人）
- ・ 本館北側等の大きな木々は、できれば残してほしい。（職員 1 人）
- ・ 学内にいる企業の意見を聞くこと自体は、入居企業としても大学との関わりを感じさせる良い機会と思うが、アンケートを実施するのであれば、事前に説明会を開催し、ご意見ご協力を募りたい旨を伝えた後に実施するものではないのかと感じている。（職員 1 人）

5. D.C.&I.戦略推進会議 K9 キャンパスマスタープラン検討チーム会議及びWGの記録

■ キャンパスマスタープラン関連検討組織 構成員 ※氏名 (敬称略)

○D.C.&I. 戦略推進会議 K9 キャンパスマスタープラン検討チーム

【学外】

齋尾 直子	東京工業大学環境・社会理工学院建築学系教授	* 大学教授等(建築、キャンパス計画の専門家)
森 淳	一般社団法人目黒会会長	* 大学キャンパス・施設に関する学外有識者
森 昶浩	調布市行政経営部企画経理課産学官連携担当係長	* 地方公共団体等関係者
十河 信介	京王電鉄株式会社開発事業本部プロジェクト推進部長	* 地方公共団体等関係者

【学内】

田野 俊一	学長
三浦 和幸	K9 リーダー・理事 (総務・財務担当)
小花 貞夫	理事 (研究・産学官連携戦略担当)
阿部 浩二	理事 (教育・国際戦略担当)
大家 万明	理事 (経営・広報戦略担当)
岡山 義光	理事 (キャンパス情報基盤担当)
村松 正和	副学長 (教育担当)
坂本 真樹	副学長 (広報担当)
中村 淳	副学長 (キャンパス情報基盤担当)
西野 哲朗	情報理工学研究科長
西岡 一	情報理工学域長
山本 佳世子	情報学専攻・共同サステイナビリティ研究専攻教授
柏木 岳彦	共創進化スマート社会実現推進機構特任准教授
樋口 貴弘	共創進化スマート社会実現推進機構特任准教授
大藪 敏晶	総務部長
泉 茂樹	学務部長
中村 修一	学術国際部長
小林 翼	総務部総務企画課長
田端 敬正	総務部総務企画課参事役 (広報・基金・卒業生担当)
小林 律明	総務部人事労務課長
赤石 亘	総務部財務課長・経理調達課長
牧村 恭子	総務部施設課長
金子 雄一	総務部研究科等事務課長
菊池 誠治	学務部教務課長
片伊木 徹	学務部学生課長
茂木 利貞	学務部入試課長
脇野 崇	学術国際部研究推進課長
森岡 緑	学術国際部学術情報課長
江幡 忍	学術国際部国際課長

【文部科学省「国立大学法人等におけるイノベーション・commons (共創拠点) の先導的事例の創出支援事業」再委託先】

一般社団法人キャンパスとまち計画研究所

上野 武	千葉大学名誉教授
倉田 直道	工学院大学名誉教授
齋尾 直子	東京工業大学環境・社会理工学院建築学系教授
恒川 和久	名古屋大学大学院工学研究科教授
武田 史朗	千葉大学大学院園芸学研究院ランドスケープ・経済学講座教授
長沢 護	株式会社社長大まちづくり推進事業部理事
横田 泰子	

【オブザーバー】

文部科学省大臣官房文教施設企画・防災部計画課

廣田 貢	整備計画室長
宮城 万梨子	整備計画室長補佐
永友 貴博	整備計画室企画調査係長
高山 健介	整備計画室企画調査係員

○D.C.&I. 戦略推進会議 K9 キャンパスマスタープラン検討チーム ワーキンググループ

田野 俊一	学長
三浦 和幸	K9 リーダー・理事（総務・財務担当）
山本 佳世子	情報学専攻・共同サステイナビリティ研究専攻教授
横川 慎二	情報学専攻・i-パワードエネルギー・システム研究センター教授
伊藤 毅志	情報・ネットワーク工学専攻准教授
小泉 憲裕	機械知能システム学専攻准教授
庄司 暁	基盤理工学専攻准教授
柏木 岳彦	共創進化スマート社会実現推進機構特任准教授
樋口 貴弘	共創進化スマート社会実現推進機構特任准教授
島崎 俊介	教育研究技師部学術技師
牧村 恭子	総務部施設課長
今野 綾	総務部経理調達課管財係長
和田 健嗣	総務部財務課財務係主任
井野 智美	総務部施設課建築係主任
岩佐 拓哉	総務部施設課施設企画係員

○事務 総務部施設課

■キャンパスマスタープラン関連検討履歴

○D.C.&I. 戦略推進会議 K9 キャンパスマスタープラン検討チーム会議

第1回：2021年8月25日
第2回：2022年7月26日
第3回：2022年8月18日
第4回：2022年9月29日
第5回：2022年12月19日
第6回：2023年1月24日

○D.C.&I. 戦略推進会議 K9 キャンパスマスタープラン検討チームWG

第1回：2022年9月7日
第2回：2022年11月22日
第3回：2023年1月16日

○「UEC 共創進化スマート大学キャンパスマスタープラン」アンケート

第1回：2022年8月5日～8月22日
第2回：2022年12月20日～2023年1月10日

参照資料

■カーボンニュートラル推進計画

<https://www.uec.ac.jp/about/mission/carbonneutrality.html>



■環境報告書 2022

<https://www.uec.ac.jp/about/publicinfo/pdf/report2022.pdf>



**電気通信大学 共創進化型イノベーション・commons
キャンパスマスタープラン 2022**

2023 年（令和 5 年）3 月策定

企画・編集

D.C.& I. 戦略推進会議 K9 キャンパスマスタープラン検討チーム
一般社団法人キャンパスとまち計画研究所
総務部施設課

表紙・デザイン

張 益準（千葉大学）
一般社団法人キャンパスとまち計画研究所

問い合わせ先

総務部施設課
〒182-8585 東京都調布市調布ヶ丘 1-5-1
Tel : 042-443-5051
E-mail : uec-shisetsu@office.uec.ac.jp

